

小田原史談

第245号

発行所 小田原史談会
小田原市東町 1-21-18
平倉方 TEL (34) 8363

新名学園創立者 新名百刀の軌跡

宇佐美 ミサ子

一はじめに

二〇一四年七月、私は小田原史談会総会で「西さがみ地域を彩った女性たち」と題して講演を実施した(『小田原史談』会報(第二三八号)。小田原町内で質屋を生業としていた関喜久子のこと、喜久子の人物像を通して、明治における女性の生き方がテーマであった。既に関喜久子については、『小田原市郷土文化館研究報告』(第四三号)に拙稿をまとめている。

続いて今回、西さがみ地域の女性について本会発行の『小田原史談』への執筆を依頼され、お引き受けすることになった。執筆の対象となる女性は、現学校法人新名学園旭丘高等学校の創立者である新名百刀(モト)である。

ところで、幕末から明治にか

けての日本は激動の時代であったことは周知であろう(一)。

一八五三年ペリー来航以来、二〇〇余年も続いた幕藩体制が揺らぎ、各地で倒幕運動が繰り広げられ政治変革が起こったが、一八六七年一月、十五代将軍徳川慶喜が大政奉還したことにより、旧体制に終止符が打たれた。そして、翌六八年に天皇を中心とした中央集権的近代国家体制が樹立されたのである。

しかし、旧体制から新体制への変革は多くの曲折や葛藤があり、そう簡単には、変わることはなかったのである。まずはじめに、新政府が国家の基本方針を「国民」に提示したのは「五箇条ノ誓文」であろう(2)。

しかしながら、「誓文」に示されたことが必ずしも一般国民にスムーズに示達されたわけでは

なく紆余曲折を経ている。

同年九月には、年号を「明治」と改め、数々の旧制度が改正され、曲がりなりにも近代化が促進された。そこで、明治政府が近代化にむけて、もつとも力を傾注したのが教育であった。

一八七一年七月、政府は文部省(現文部科学省)を設置し、国民が学べるよう国民皆学を推進し、続いて七二年に学制を布き、国民皆学は義務化されることになったのである。

こうした新政府の方針は、太政官布告によって明らかである。

そこで、布告史料を参照されたい(次頁右下)。

太政官布告に示されているように、政府の教育方針は、人々が「身ヲ修メ」「知ヲ聞キ」「才芸ヲ長スルハ」、まず、学ぶことにある。つまり、これからは「一般ノ人民」も、華族、士族、農・工・商の有力な人々など、身分の差別なく、「平等」に学ぶことが可能となったということにほかならない。「必ス邑ニ不学ノ戸ナク、家ニ不学ノ人ナカラシメン事ヲ期ス」ことで、全国民の就学義務の徹底を計ったわけである。学制は教育の基本であることから、男子女子ともに六歳になると小学校に入学し学習することが義務づけられた。

二百四十五号(平成二十八年四月号)

目次

新名学園創立者 新名百刀の軌跡

宇佐美ミサ子 1

旅のつれづれ俳句日記

剣持芳枝 7

小田原の郷土史再発見

西国で継承された北條氏と伊勢氏

石井啓文 8

小田原の小西薬舗

話し手 小西正樹さん 12

大久保宗家六代忠増第三番目の

夫人、寿昌院(喜与姫)

野村武男 14

小田原桐座について(五)

—由緒書の検討を中心に—

荒河純 18

「片岡日記」昭和編(六)

片岡永左衛門 23

「温故知新・小田原桐座」

講演予告 13

新会員紹介 22

史談会セミナー報告・予告 26

小田原史談会平成二十八年年度

総会・講演会予告 27

史跡巡り案内

小田原早川上水 27

小田原・足柄歴史六団体

合同展示会開催お知らせ 27

特別賛助会員
落穂集 28

これを機に地方にも義務教育普及のための「就学告諭」が示達され、特に女子の就学を推進しようとして強調したが、現実には新政府の思惑通りには行かず一般に普及浸透することは、極めて困難であった。

恐らく「女子は子守り」「家事手伝い」「女中奉公」という旧弊は、そう簡単には払拭できなかつたのである。しかし明治政府は、欧米の思想・文化を受け入れることの必要性を痛感しつつも、総体としては、旧思想と欧米の自由な思想や文化の乖離を埋めることの課題は山積していた。が、新政府は欧米諸国に「追い付け」「追い越そう」という政治の方針を基調に、旧規範を排除、矛盾を抱えつつも「西洋化」を積極的に推進することに腐心した。

つまり、近代国家の確立は、欧米諸国を範として旧封建的体制下における「儒教的」政治思想、女性観の見直し、念頭にあったのではないかと考えられる。その典型的な例が、学制公布の前年、一八七一年十一月の津田梅子ら五名のアメリカ留学である(3)。このような現象がモチベーションとなり、女子教育が急速に展開していく。

これ以降、福沢諭吉の『女学批判』『西洋事情』『学問のすす

め』、中村正直著『自由之理』などが一世を風靡(び)し、人々の間で広く読まれた(4)。当時のベストセラーである。さらに女子も英語を学ぼうという風潮があり、都市は言うまでもないが、各地方にも起こった。小田原地域でも女子英学塾設立の動きもあったが、土族(旧藩士)らの反対で幻と潰えた。

しかし、一方、明治政府は、「公教育」推進する過程で、「家族制度」を基本とする「良妻賢母」が、女子教育の理想であるという方針を示した。これは、一八九〇年に公布された民法に裏付けられた概念で、「家」中心が重視され、女子教育が大きく展開していくのである。つまり、欧米の自由な考え方と、前近代的日本主義の「女性像」がどのようにドッキングするかが、女子教育の具体的な役割であり機能であった。

さて、次の史料を見よう。周知のように左下の勅令は、「高等女学校令」で、高等女学校が女子に高等普通教育を与えることを目的としたもので、良妻賢母主義教育の徹底をはかることを明言している。即ち、史料に見られるように、女性としての品格は、女性の役割分担が必須で、それには、まず、夫に対しては、「良き妻」であること、子どもには、「良き母」であること、「家」を

学事奨励に関する太政官布告(被仰出書「おおせいだされしよ」)
人々自(みずか)ラ其身(そのみ)ヲ立テ其産(さん)ヲ治(おさめ)メ其業(ぎょう)ヲ昌(さかん)ニシテ以(もつ)テ其生(せい)ヲ遂(とぐ)ル所以(ゆえん)ノモノハ他ナシ、身ヲ修(おさ)メ智(ち)ヲ開キ才芸(さいげい)ヲ長スルニヨルナリ。而(しかし)テ其身ヲ脩(おさ)メ智ヲ開キ才芸ヲ長スルハ学(がく)ニアラサレハ能(あた)ハス。是レ学校ノ設(もうけ)アル所以ニシテ、……人能(よ)ク其才ノアル所ニ応シ勉勵(べんれい)シテ之ニ従事シ、而(しか)シテ後(のち)初テ生ヲ治メ、産ヲ興シ、業ヲ昌ニスルヲ得ヘシ。サレハ学問ハ身ヲ立ルノ財本(さいほん)共(とも)ニ云(いう)ヘキ者ニシテ、人タルモノ誰カ学ハスシテ可ナランヤ。……自今以後、一般ノ人民(華士族農工商及婦女子)必ス邑(むら)ニ不学ノ戸(こ)ナク、家ニ不学ノ人ナカラシメン事ヲ期ス。人ノ父兄タル者宜(よろ)シク此意ヲ体認シ、其愛育(あいいく)ノ情ヲ厚クシ、其子弟ヲシテ必ス学ニ従事セシメサルヘカラサルモノナリ。(高上ノ学ニ至テハ、其人ノ財能ニ任カストイェトモ、幼童ノ子弟ハ男女ノ別ナク小学ニ従事セシメサルモノハ、其父兄ノ越度タルヘキ事)
(『法令全書』)

① 学制の教育理念を示した太政官布告で、学制の前文になっていた。

「高等女学校令」
第一条 高等女学校は女子に須要なる高等普通教育を為(な)すを以(も)つて目的とす
第十八条 本令の規定に依(よ)らざる学校は高等女学校と称することを得ず
「高等女学校令施行規則」第一章 学科及其ノ程度
第二条 修身(しゅうしん)は教育に関する勅語(ちよくご)の旨趣に基き道徳上の思想及情操を養成し中等以上の社会に於ける女子に必要な品格を具(そな)えしめんことを期し実践躬行(ききうこう)を勸奨するを以て要旨とす
第一〇条 家事は家事整理上必要なる知識を得しめ兼て勤勉、節儉、秩序、周密、清潔を尚(たつと)ぶの念を養うを以て要旨とす
第一一条 裁縫は裁縫に関する知識技能を得しめ兼て節約利用の習慣を養うを以て要旨とす
(注) 新名学園設立の根拠法令である私立学校令は一八九九年八月三日に交付されている。

守り「国家」へ貢献することが最も重視されなければならないという教育観であった。

なお一方、「公教育」の徹底と同時に「私学教育」が展開する。

「私学」とはパブリックに対して、リバティな教育であることは周知であろう。一般的には、ミッションスクールを指すことが多い。周知のように、ミッションスクールはキリスト教を教育の根幹とする学校教育で、「私学」教育の普及は、これだけでなく、同時に「公教育」の提唱する「良妻賢母」を学校の教育の方針とした「私学」が創設され、普及された。例えば、ミッションスクールでは神奈川県内でキタールの創立したフェリス学院や、後者では新名百刀の設立した新名学園(現学校法人新名学園旭丘高等学校)などである。

では、「公教育」に呈示されている女子教育の理念である「良妻賢母」を、私学ではどのように考え、把握され、展開したのか。次章で、新名百刀の設立した新名学園の動向と、創立者・新名百刀の人物像にアプローチしたいと考える。

一、新名学園創設期の教育

1. 新名学園創立者、新名百刀の出自

新名百刀は、一八七二年一

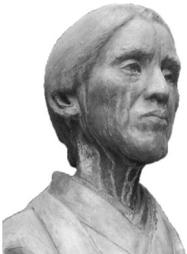
月、美濃国大垣藩士、水野山平の長女として生まれる。

江戸時代、大垣藩主・戸田采女正は石高十萬石の譜代大名で、百刀の実父である水野山平は藩主・采女正の側用人として重要な役割を果たしていた。水野家は江戸初期から、代々、閑流和算家として、その名はつとに知られ、百刀の曾祖父・水野民興陸沈は藩校「致道館」(二八四〇年八月〜一八六九年)の創立者で、代々教育者の家系であった。このような恵まれた家庭に育った百刀の思想形成は、少女時代に培われたものと思われる。

一八七七年七月、大垣町立の公立小学校に入学、八年間の学業を終了する。当時また「女には学問はいらぬ」というような風潮の中で、百刀はエリートコースを辿ってきているのである。

一八八六年、百刀は十四歳で単身上京。

私立共立女子職業学校編物本科へ入学、普通教育も履修、成績も抜群であった。翌年の八月、同校を卒業し、同校の編物本科の助教授を命じられるが、一年間勤め



新名百刀 像 (旭丘高前)

建議書(けんぎしよ)

時勢ノ進運ニ伴ヒ女子教育ノ普及發達ヲ促(うなが)スコト年一年ヨリ切ニシテ今ヤ一日モ緩(ゆる)フスベカラザルノ時機ニ迫レリ而(し)テ全國ノ府県相競(きそ)フテ之ガ開發ニ鋭意シ其多キコトハ五六校其次位ニシテ尚三四校ヲ設立セシ者少シトセズ曰ク女子師範学校ヨリ高等女学校或ハ女子工業或ハ女子職業若ハ技芸及織物等ノ諸校各々土地ノ状況ニ從ヒ其種數ヲ異ニスト雖(いえど)モ皆女子教育ニ切実ナラザルナシ豈盛(あにさかん)ナラズヤ願フニ本県教育ノ状態ハ近年大ニ發達シ國民教育ノ外三箇ノ中学校ヲ設立セラレ又將(ま)サニ第四中学校設置ノ議アリト聞ケリ然ルニ女子ノ為メニハ僅カニ一高等女学校アルノミ是果シテ県下幾千ノ女子ヲシテ遺憾(いかん)ナリ就学セムトニ足レリトナス乎(か)其不可能ナル固(もと)ヨリ知ルベキノミ殊ニ時勢ノ要求ガ女子教育ノ普及發達ヲ促シツツアル今日ニ於テ如何ゾ逡巡遲緩スヲ得ンヤ妾等同志者之ヲ概スルコト愈々切ニシテ其設置ヲ望ムコト益々急ナリ而シテ其位置ハ当地方ヲ以テ極メテ好適ナルヲ信ズルモノナリ加之ノミナラズ女子生徒ノ夥多(おびただし)ナルハ全県下ヲ通ジテ本郡ニ若クモナシ已ニ兩ナガラ其宜シキヲ得ルトセバ其位置ヲ茲ニトスレハ洵ニ当然ノ事由ナリトス依テ妾等一同茲ニ県立高等女学校ノ設立ヲ望ム甚々切ナリト雖然モ其設立ニ至ル一切ノ行動ハ素ヨリ之ヲ男子諸君ノ熱心参力ニ待ツ可クシテ巾幗(きんかく)ノ身如何ニ多キモ決シテ其任ニ当ル可ク亦堪(たゆ)ユ可キニモ非ラズ妾等一同ハ唯ダ書ヲ呈シテ賢明ナル小田原町長貴下及其他職ニ当ラルル男子諸君ノ奮勵ニ依頼シテ一日モ其設立ノ速ナランヲ県ノ当局ニ到サレンヲ希望ス

右県立高等女学校期成婦人会連署人名

| | | | | | | | |
|----|----|----|-----|----|----|----|-----|
| 樋口 | カン | 加藤 | ノブ | 榎島 | コウ | 加藤 | 光子 |
| 大高 | 禮ジ | 松本 | ツル | 志村 | ハナ | 隠岐 | イソ |
| 岡田 | ヤス | 関 | 喜美子 | 横沢 | 久良 | 辻村 | 歌子 |
| 片岡 | 松子 | 飯田 | リウ | 高木 | ヒデ | 泉 | 喜久 |
| 益田 | 郁 | 関 | エイ | 山田 | エツ | 山田 | トミ |
| 飯田 | ハナ | 荒井 | 久子 | 芹沢 | ノブ | 西村 | ヨシ子 |
| 牧野 | トフ | 牧野 | キヨ | 小沢 | 古興 | 鈴木 | ギシ |
| 今井 | コト | 鈴木 | ハツ | 真田 | ナカ | 磯部 | マチ |
| 河野 | ツネ | 尾崎 | ムメ | 小西 | スメ | 野沢 | テル |
| 新名 | モト | 二見 | ゲン | 辻村 | 貞子 | 河合 | 千弥 |

明治三十九年十一月五日 県立高等女学校期成(きせい)婦人会

退職する。造花、手芸、洋服のデザインなど、家政学一般を学び、続いて東京市渡辺裁縫学校で裁縫の基礎は勿論、家政学の理論を習得。一八九二年九月、東京府(現東京都)の教育検定試験を受験し、合格。この年の十二月に小学校の免許を取得、東京市の高等小学校の訓導となる。

さて、百刀の一大転機となったのは、一八九三年二十歳の時である。ある一つの出会いがあった。それがまた、小田原へ来る契機ともなったのである。それは、福井県出身の士族で、医師の新名友作と結婚したことである。

これより、小田原での百刀の生活のページが開かれ、小田原における「実学教育」の先駆けとなった。

「実学教育」とは、所謂「職業訓練」、女性も「手に技をつける」ということで、「良妻賢母」思想とは二律背反ではないかと思われがちだが、そうではなく、一般に「女紅場」が女性の間では好評で、家事をこなし、さらに、女性も技術を習得し「自立」し「生計」を営むことを志向した。

2. 自立する女性の萌芽

百刀が小田原に根付いたのは、一八九九年である。夫友作の病氣療養のため、小田原郊外の国府津

村に転地療養をする。周知のように、小田原は、山あり、海あり、

という風光明媚の土地で、避暑地として、東京、京浜地帯から政治家をはじめ、文化人たちが数多く来原した。特に、一八七二年、新橋―国府津間に鉄道が開通し、続いて、国府津―小田原―湯間に馬車鉄道が通行すると、ますます著名人が当地に別荘を営み住し、地域の人々との交流もあったという。一九〇一年、夫・友作が死去。百刀二十九歳であった。

この時期、明治三十年代は、各地で高等女学校が設立されている。小田原地域でも一九〇六年に、「高等女学校期成婦人会」が、小田原町長加藤定通宛、高等女学校設立の「建議書(前頁下)」を提出し、翌一九〇七年、小田原にも高等女学校が設立された。この建議書に署名した方々は一五四名で小田原地域の有力な政・財界・文化人の婦人が多く、新名百刀は教育界の代表として連名している。高等女学校設立の主旨は、次代の国民を養成する為の「良妻」賢母」であって、「健全なる家庭」を構築することが、主流を為していた。この「良妻賢母」の思想はもともと、百刀の抱いていた最大の教育方針で、夫亡きあと、ひたすら、この道こそわが行く道」として、女子教育に努力を傾注

した。

二. 自立する思想

さて、百刀には、女性も「自立」し「生計」を営むことが重要であるという信念が底流にあった。

まず、百刀は、足元を見つめ、そこから出発する事を模索すること。具体的な方法としては、隣近所の子女を自宅へ集め裁縫を教えることだったのである。

広い教養と高い技術を身につけていた百刀の教授は、たちまちにして地域の人々の間に評判となり、「わたしも」「わたしも」と、次第に教えを請う生徒が増えはじめていた。百刀はすでに一九〇二年、「建議書」提出以前から、ユニークな裁縫、手芸を教えていたのである。自宅から小田原町万年四丁目六〇番地に「伝習所」を開設、続いて、本格的な「学舎」を設立することになった。

当初は小田原町万年町四丁目の宝安寺の寺領内にあったが、同年幸町一丁目八五三番地に移転し、新名裁縫学舎と名称、免許を持たずに始動した。後、新名裁縫女学校と改称し、「私学」として出発する。

ところが「私学」として出発してみたものの一般には未知で、女子は男子より低いものとし学ぶ対象にはならなかった。

しかし、百刀の女子教育にかける信念と強靱な意志はそんな簡単には折れない。しなやかな前進があった。それを示すいくつかの史料やエピソードを次に私なりに整理し、百刀の推進した女子教育に対する実行力を述べる。

三. 新名百刀の軌跡

まず、本章では新名百刀の生き方について、その足跡を辿りながら、私は次のように大別してみた。次の五項目がそうである。

1. 質素で謙虚である

私立新名学園を立ち上げ、多忙にもかかわらず、自ら教壇に立ち、楽しく家政学を教える。しかも、裁縫の技術は抜群で、指導も、生徒にわかり易く話すので、生徒たちは百刀先生と親しみ深く話していたという(聞きがき)。服装については、洋装が人々の間でもはやされ、鹿鳴館時代からの名残で、当時の女性たちの憧れであったドレスにもあまり関心を示すことなく、極めてシンプルな出で立ちであった。しかも、さっぱり着こなされた和服の姿は百刀の謙虚さがうかがわれる。

それが、次頁下に呈示する「新名百刀語録」である。「語録」は

五十項目から成るが、一項目ごとに百刀の謙虚さは日常生活と生徒への戒めが理解でき、いまもいきいきとし教育の根幹を為している。

2. 自立心と社会的教養

一九〇七年、新名学園は正式に私立学校として展開する。ここでカリキュラムを見てみよう。システムは左の通りである。☆本科(修業年限三年)―教科目(修身、国語、算術、裁縫、造花、他一科目)

☆研究科(不明)一人
☆促成科(修業年限一年)―教科目(裁縫、編物などの実技のみ、学科目なし)、生徒数約十五人。

本科は学級数四クラス、教師(女子四人)、生徒数(女子)九十人、授業料七〇〇円(原史料)、学園長・学校長・新名百刀。

さて、ここで注目したいのは、授業料の七〇〇円である。このころ、標準価格米十キロが一円十九銭、家賃が二円八十銭、大工の手間賃が一円である。こうしてみると、かなり裕福な家庭でないといえない不安もあったが、実はそれ程ではないのである。この七〇〇円は生徒九十人の総収入(二年分)で、ここから類推すると、一人月額六十五銭余である。

塩をなめて暮らしても、新名

女学校に入れたいのです。私の家は地主であったことで、上の学校に行くことができまして。行くなら新名さん(聞きがき)。

この聞きがきは、私の田舎の祖母の発言である。私の友人F子(故人)も、小田原高等女学校か新名裁縫女学校か、選択するのに迷い、結局、自立し、稼ぎ、経済を支えられることができるということ、新名さんに決めた。百刀先生は報徳の教えを私たちに話してくれました。手に職をつけることが、自活のできる技です。そして、人々に分け与えることが必要なのです(聞きがき)。

F子は、新名裁縫高等女学校を卒業すると、日本女子大学校児童福祉科へ入学、成瀬仁蔵の女子教育方針に傾倒し、卒業すると小学校の教師となった。続いて、新名裁縫高等女学校の講師(非常勤)となり、定年を迎えるまで家政学を教えていた。

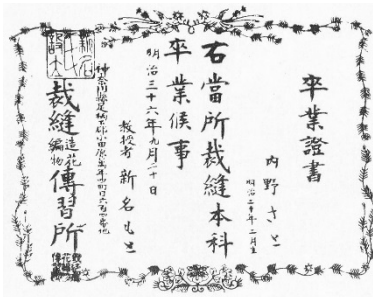
友人のF子は、よく私に百刀先生の克己心、子どもたちを差別しないという必要性を説いていた。このように、聞きがきを通して新名百刀先生の人間の素晴らしさが、ひしひしと私たちの心奥にいきこんでくる。

新名百刀語録

- ・あしきとてただ一すじに捨つるなよ、渋柿を見よ甘ぼしとなる。
- ・人はなくとも七癖を持つている。
- ・人の欠点を見つづけるな。欠点より長所をみよ。
- ・人生行路の目標を見つめよ。目標なき行為に努力は起らぬ。前途に目標なき行路は暗黒にして危険である。
- ・恵まれざるを空しくかこつ勿(なか)れ。それぞ神の試練である。漲る熱意、堅忍不撓の精神もて努力すれば必ず運命は切り開かれ、感謝の日が与えられる。
- ・口で叱られても心でほめられる人になれ。言われる事を素直に受け入れれば心でほめて頂ける。
- ・泣くなおこるな毒素が出るぞ。たった一つのふくれた顔が、広い家庭を暗くする。
- ・毎日が平凡だからといって嘆いてはいけない。平凡だから無事なのである。
- ・人となるには頭を下げよ。下げて下げらるる人になれ。
- ・鉄砲耳味噌こし味噌とんねる耳きんちやく耳はいけません。
- ・上見ればおよばぬことの多かりき、笠きて暮らせ己(おの)が心に。
- ・心とて人に見すべき色ぞなきただ行と言の葉に見ゆ。
- ・円(まる)くとも一稜あれや人心、余り円きはころびやすきぞ。
- ・火吹(ふき)竹を吹くときよりほか、ふくれた顔をするな。
- ・立向う人の心は鏡なり、己が心をうつしてや見む。
- ・生徒は大切な子、一様に愛するよに。
- ・紙屑の買手はあるが人間の屑は買手がない。
- ・べる二つを慎(つつし)みなさい。(食べる、しゃべる)
- ・仕事は人の嫌がること、難しいことをせよ。
- ・物も言いようで角が立つ。
- ・人は一代名は未代。
- ・捨我精神、克己修養。
- ・教育は種播きである。
- ・芋こじ式に修養せよ。
- ・心の眼を開け。
- ・ころばぬ先の杖。
- ・生徒は国の宝である。
- ・嫁に行くのは入学である。
- ・三日坊主はいけません。
- ・準備と後始末をよくせよ。
- ・色眼鏡をかけて人を見るな。
- ・覆(ふく)水盆に還らず。
- ・義理と人情。
- ・出る杭(くい)はうたれる。
- ・二兎(と)を追う者は一兎をも得ず。
- ・稔(みの)るほど頭の下る稲穂かな。
- ・下る程人は見上げる藤の花。
- ・たのまれ甲斐のある人になれ。
- ・生徒と先生とは常に根比べである。
- ・人の相談相手になれる人になれ。
- ・上を見てはいけない、下を見て暮せ。
- ・善に対しては意志強く。
- ・二つしかって三つほめる。
- ・子持の家に食事に行くな。
- ・内緒事、隠し事はいけません。
- ・信用は無形の財産なり。
- ・現在のままで感謝を見出せ。
- ・若い時の苦勞は買つてもせよ。
- ・目あき千人、盲人千人。
- ・一心整つて万物服す。
- ・注意を小言と思うな。



第一回卒業生記念写真 明治36年(1903)
後列右から6番目が新名百刀



新名百刀(もと)が第一回卒業生
に授与した卒業証書

3. 尽忠報国と戦時下の意識
一九三七年、日中戦争がはじまる。いわゆる大陸侵略への道である。大日本帝国臣民である女学生たちは、戦場で神国日本の為に命をかける男子に対し、何をなすべきか。百刀は、当時の校訓、「皇室中心」(国家を主眼に)「主義は報徳」(至誠勤労分度推譲)

をモットーにして活動した。

また百刀は、常時、子どもがもつとも大事。貧しい人々に手を差しのべ、子どもが不幸になつてはいないだろうか、弱者への配慮を持ち続けていた。子どもたちから「百刀先生」と母親のように親われ、父兄からは安心して新名さんと学べると尊敬されていた。異常とも言える戦時状況で国家への奉仕に全力投球した百刀ではあるが、いかなる状況であろうと常にその置かれた場の中で考えて行動する子ども中心の教育方法を展開してきた。私は、「語録」の項目を読み解いて、新名百刀の深い人間愛に触れ、あらためて「良妻賢母」思想を考えてみようと思った。但し、あくまでもジエンダーの視点からの課題で論を進めていきたい。一九四二年逝去。

あとがき

本年(二〇一六年)は、新名学園旭丘高等学校創立百十年である。丁度、私は、新名学園旭丘高等学校の「私学教育研究所」の共同研究スタッフとして、かわりがあることから、いつの日か、学園の創立者新名百刀の人となり、女子教育に全力を傾注した一女性のことを執筆したいと考えていた。今回、はからずも、新名学園の『百十年史』企

画に参加し、勉強会・研究会で新名百刀についての資、史料に触れ、あらためて、既成の事実の再生ではなく、新しく知見を得ることができた。

私には、新名百刀について女性史研究の対象として執筆する計画は持つてはいたものの、最大のネックは、伝統的家族制度に裏付けられた「良妻賢母」思想が、なかなか理解できずにいた。しかしながら、新名百刀の女子教育にかける情熱と信念は、日本固有の伝統を重視しつつ幅広く西欧の文化を同化させるといふ高邁な思想と、倫理観が底流にあつたのである。私が、そのことを実感したのは、現新名学園旭丘高等学校の学校経営方針に見ることができるところである。

「私(個人)」「家族」「学校」「地域」という「場」で「考える子どもを育てる」、自己の信念を持ち、「自身で学び考える」教育、このようなシチュエーションこそ、真の教育の可能性を秘めている。特に女性には「自立」「自身」ということが大切であると思う。そういう意味で新名百刀は百二十年前に、既にこのような教育方針を編み出し、実践していたのである。

さて、残された課題は多々ある。私は、現在、明治以降の主体

的に生きた地域の女性たちを掘り起こし、ようやく新名百刀の女子教育を推進した意味の片鱗に辿り着いたが、少しでも多くの女性たちに目をむけ、掘り起こして行きたいと思いつつ、小田原市域に生活する一人の人間として、生活者として、ゆるやかに前進をしようと思っている。

それにつけても、本稿執筆にあたり、お世話になつた方は多い。まず、女性史研究家のパイオニアでもある私の大先輩、永原和子さん(元明治大学講師、総合女性史学会初代代表、小和田美智子さん(総合女性史学会事務局長、静岡英和学院大学兼任講師)には、アドバイスを賜つた。衷心より御礼申し上げたい。

その他、新名学園旭丘高等学校長・水野浩先生他諸先生方、職員、同校『私学教育研究所』三輪定信研究所長他共同研究者の先生方、『小田原女性史研究会』鍵和田ユミ子代表他会員の方々にはお世話になつた。ここでは、個人一人一人の御芳名は、省略させていただいた。私は、何かにつけて多くのご援助を受けているので、申し訳ありませんが、文面で御礼申し上げます。近世史・女性史研究家)

注

(1) 中根賢『戊辰戦争下の小田原と遊撃隊』(『交流の社会史』所収・岩田書院刊 二〇〇〇年刊)

(2) 五カ条ノ誓文

一、広ク会議ヲ興シ万機(ばんき)公論ニ決スベシ

一、上下(じょうか)心ヲ一ニシテ盛ニ經綸(けいりん)ヲ行フベシ

一、官武一途庶民ニ至ル迄各其志ヲ遂ゲ人心ヲシテ倦(うま)ザラシメン事ヲ要ス

一、旧来ノ陋習(ろうしゅう)ヲ破リ天地ノ公道ニ基クベシ

一、智識ヲ世界ニ求め大ニ皇基(こうき)ヲ振起スベシ

(3) 明治四年(一八七二)右大臣岩倉具視を全権とする使節団の欧米に派遣された五人の女性(下表参照)。

(4) 『明六雑誌』明治甲戌二月明六社で発行した雑誌

メンバーに西周、福沢諭吉、中村正直、加藤弘之、津田真道、箕作秋坪、森有礼。

旧開成所関係の学者たちによって結成され、欧米思想を日本に普及させた唯一の雑誌。

The Society of science
technic and literature
(原文)

注に記した以外の参考文献は、

『新名学園の『学園史』

(80年史、90年史、100年史)等)他、私学教育研究

所、資史料

『旭丘学報クローバー』卒業特集他

服藤早苗・宇佐美ミサ子共著『西さがみ女性の歴史』

(夢工房、二〇〇九年刊)

拙著『私の戦後史』(夢工房二〇一五年刊)

『消したくない史実』(小田原女性史研究会解説、フイナル 二〇〇一年)

| 氏名 | 年齢 | 帰国 | 帰国後の活動 |
|------|------|------|--|
| 津田梅子 | 6歳 | 17歳 | 生涯女子教育を推進。津田塾大学の創立者。英語教育を推進。多くの優秀な英語教師を養成。 |
| 山川捨松 | 11歳 | 24歳 | 帰国後大山巖陸軍卿(陸軍大臣)と結婚。日本赤十字社、愛国婦人会設立など、奉仕活動に従事。鹿鳴館パーティの外交的役割。 |
| 永井繁子 | 10歳 | 20歳 | 帰国後、瓜生海軍武官と結婚、音楽教育を推進。音楽家として活躍。 |
| 植田園子 | 17歳 | 18歳 | 社会福祉に生涯をかけ、奉仕活動を実施。ボランティア活動の先駆者。 |
| 吉益享子 | 28歳? | 29歳? | 社会福祉に専念。 |

旅のつれづれ俳句日記

劍持 芳枝

うらかな四月半ばのある日、史蹟めぐりの一行は岡崎方面へ出発した。東名足柄サービスエリアで休憩、富士山は霞にけむっているようであつたらと姿を見せていた。浜名湖を経てやがて岡崎インターに入った。先ず六所神社へ。天文十一年家康の誕生に際して産土神として拝礼されたのだそうで、現在では安産の神様として多くの信仰をあつめているとのことだ。六月三十日には茅の輪くぐりの神事が行われる。岡崎公園に入ると先ず大手門、檜作りの扉が立派だった。家康館、能楽堂など見る所はいっぱいで岡崎城は遠くより眺めただけだった。見学後は隠居廓跡の「いちかわ」という食堂で昼食となった。味噌田楽や刺身煮物などとても美味しかった。岡崎では八丁味噌が名物で何所からか匂いがただよってくるようだった。

味噌樽の干されて匂う春の昼

公園内の家康の人形が能を演じるからくり時計が、一時に始まるそうであつて待っていた。中々よく出来ていて衣装も立派で三分間じつと見つけてしまった。最後に有名な遺訓「人の一生は」のくだりがかたり、家康の人柄が偲ばれる思いだった。バスに戻り伊賀八幡宮へ向かった。松平親忠が武運長久の神として文明二年に三重の伊賀より勧請したのだそうだ。代々出陣ごとに必ず祈願して神霊の加護を受けたという。毎年一月七日が武者的(まとい)神事の日で、六月三十日には夏越の輪くぐり神事が行われている。二時には大樹寺へ。松平氏の菩提寺で大樹とは唐名で將軍を意味するのだそうだ。襖絵が中々立派だった。家康が征夷大將軍になると將軍家先祖の菩提寺として遇された。家康が没すると位牌は三河大樹寺に祀るべきという遺命によって、以後歴代將軍の等身大の位牌が安置され、幕府の手厚い保護を受けたのである。最後は滝山東照宮の見学で急な坂道を上って大分足がくたびれてしまった。滝山東照宮は三代將軍家光の創建で、日光東照宮、久野山東照宮とともに日本三東照宮と称されており、拝殿や中門本殿などの重要文化財が保存されているのだった。四時前には見学を終え帰途についたのである。

山並みのゆっくり暮るる麦の秋

楽しい有意義な史蹟めぐりの旅が出来て素晴らしい一日であつたと心から感謝している。

小田原の郷土史再発見

西国で継承された北條氏と伊勢氏

石井 啓文 ひろふみ

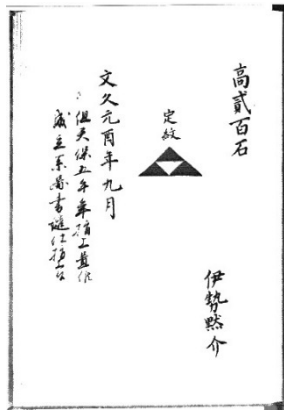
天正十八年の小田原合戦に敗北した北條氏は、三代氏康の五男で氏政の弟氏規が狭山北條氏を許され、維新まで存続したことは知られているが、玉繩城主であった北條氏繁の次男氏勝が、下総岩富城主(佐倉市岩富)一万石を許され養子氏重(保科正直四男)を迎え転封後、掛川城主三万石になったことは余り知られていない。氏重に継男子なく大名としては断絶したからであるが、旗本で北條氏を継承している。

本稿は、西国で北條から伊勢氏を継承した二家を紹介する。

一、阿波徳島藩蜂須賀家の北條氏と伊勢氏

北條氏政と黄梅院の五男で氏直の弟直重は、初め叔父で八王子城主大石氏照の養子になるが、本佐倉城主(佐倉市大佐倉)千葉邦胤の急死により、再養子で千葉氏を継承している。(千葉家譜)小田原落城後、兄氏直に同行して高野山に登る。宥免後は秀

吉の折紙付で阿波徳島城主蜂須賀小六正勝に預けられ、知行五百石を賜り北條直重に復した。以下は、徳島伊勢家の江戸時代最後の当主九代伊勢黙介直誠が記した同家『成立書并系圖』(徳島大学付属図書館蔵)を参照した要約と、右下に略系図を作成した。(左、同書奥書)



徳島移住後、蜂須賀氏家臣市原実兵衛妹を継室に迎え、嫡男十三郎が生まれるが早世。同家宿老益田豊正の三男納之助を養子に迎え、家督継承が許されると剃髪して「謙入」と号して隠居し、寛永四年(一六二七)三月没。法名は即室謙入居士とある。納之助は初め北條を称している

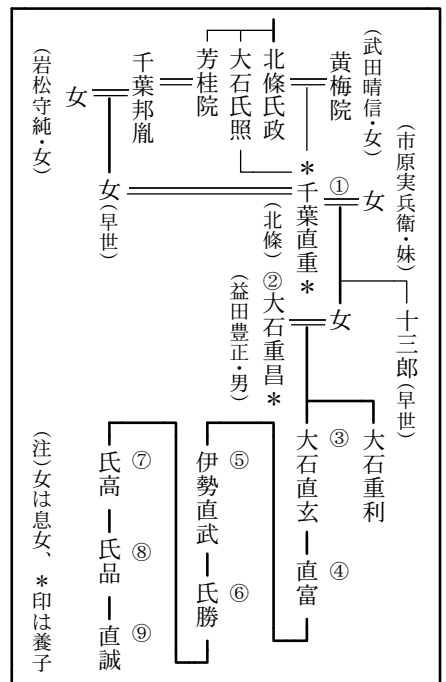
たが、養父直重から「日頃、北條姓は宜しくない。大石(直重最初の養子先)を名乗るべし」と言われていたことから「大石重昌」に改姓している。

知行五百石を継承し、鉄砲組頭として関ヶ原役でも活躍し、家中でも優遇されていた。

ところが寛文三年(一六六三)、何故か主家に暇願を提出して嫡子重利を連れて徳島を出、浪人して大坂に移り住み「休閒軒」と号し、延宝五年(一六七七)二月に病死している。

同行した重利は、江戸に下るが同七年閏二月の蜂須賀家帰参命令に帰国し、二百石を許されるが同十年九月に病死。妻は同家林和泉吉時娘、兩人の娘も同家仁尾右京永栄に嫁いでいる。大石家は、重昌の次男直玄が新知二百石で分家を許され大石家三代を継承している。

その後四代直富も大石姓を名乗るが、五代直武が実家(北條家)の先祖とされる「伊勢」に改姓を許され幕末まで続いている。直武の伊勢改称は曾祖父の出



奔を嫌ったのではないだろうか。八代氏品が同家の出世頭であるろう、郡代から御藏奉行兼勘定方も勤め上席を許されている。『系図』には、北條氏政が伊勢季衡十七代の孫とあるが『桓武平氏系図』に一致する。なお、九代黙介直誠は『徳島藩士譜』から文久元年(一八六一)の死去が確認できる。

二、幕末、長州萩藩の北條瀨兵衛と源藏兄弟

北條氏康の六男氏忠(氏綱四男氏堯の子で養子説あり)は、下野唐沢山(栃木県佐野市)城主佐野宗綱の養子になり佐野氏忠を称し小田原落城後、氏直と共に高野山で謹慎、宥免後は伊豆河津の林際寺に隠遁している。室乗讚院と娘姫路は毛利輝元に預けられて百石を与えられ、

娘姫路が毛利家臣を婿に迎え(異説あり)北條氏を継承している。

昨年(黒田基樹著『北条草雲とその一族』)の大河ドラマ「花燃ゆ」を見ていて、ネットで「禁門の変」を検索すると、長州萩藩大坂屋敷留守居役の北條瀬兵衛が、「変」に敗れて逃げてきた毛利氏家臣を収容するが、幕府に同屋敷は没収されて萩に帰国し、北條瀬兵衛は謹慎したとある。

この瀬兵衛の弟北條源藏も万延元年正月、幕府が安政通商条約批准のため新見豊前守をアメリカに派遣した際、随行員としてポーハタン号で渡米している。

この北條兄弟と前記北條氏忠妻子とは関係があるのだろうか? 山口県立図書館に訊ねた。以下は、「ご指導いただいた」萩藩における後北条氏(田中助一・筆)を主にした報告で、山口では乗鑽院は乗鑽院とあるのでそれに倣い、北条は北條と記す。

乗鑽院と娘姫路の墓

前記資料は冒頭、萩の海潮寺(毛利家菩提寺)にある北條氏の墓を、天保五年から安政二年に萩藩士木梨右衛門が編纂した『八江萩名所図画』から記している。

野面石の塔が二基あり「一つは北條氏直(ママ)室の大方(当主夫人をいう)で乗鑽院殊溪栄法

大姉、寛永七年庚午六月廿七日と刻む。一つは姫路と称する同息女の墓で高正院運悟妙慶大姉、寛永十八年辛巳十一月九日とちりばむ」とある。

また、明治三十七年に元萩藩士近藤清石編纂の『山口県風土誌』も、同様に大方と姫路の墓を記しているが、大方は北條左衛門大夫氏勝(ママ)室で、「大方は豊臣太閤が北條氏を征し、氏勝及び其女ヒメヂを合せて毛利輝元卿に預けらる。之を安芸国草津に置く。氏勝草津に没し、大方母子関ヶ原陣の時大坂に赴く。秀就の代に至り母子旧縁を以て萩に来れり」とある。

そして氏忠が隠遁した河津の林際寺『過去帳』も調べ、乗鑽院の「墳墓ハ長門国萩城魚棚町総源山海潮寺ニアリ」、娘も「姫路君ト申ス、墳墓地ハ長門国萩ノ城下魚棚町曹洞宗能登国総持寺末総源山海潮寺ニアリ」を記し、大方は北條左衛門氏忠室と断定し、河津にある氏忠の墓についても記している。

「寺(林際寺)ヨリ東方二当り所有地アリ、字経塚ト申ス所ニ小田原三代氏康公第五子北條左衛門氏忠公ノ墳墓アリ。文禄二年癸巳四月八日逝去セリ、生前ノ信仰ニ依リ、林際寺第六十六世大機和尚ニ就テ葬儀ヲ修行ス。法名ハ

大関院殿太嶺宗香大居士、号大関齋、当山ノ大檀那也」

以上五点の史料から、乗鑽院は氏忠室(林際寺過去帳)が正しく、萩史料の氏直室や氏勝室は間違いで、氏忠が文禄二年(一五九三)、乗鑽院が寛永七年(一六三〇)、娘姫路が同十八年(一六四二)の他界を立証している。私は、氏勝(氏忠妻子共に「輝元に預けられ」に注目した。

氏忠は初めは広島に行き、それほど日を置かず河津に来たのではないだろうか。他界したのは、天正十九年十一月の氏直死去二年後である。

氏直や氏勝・室、それに草津没は間違いか、それとも何かの事情で氏忠の隠遁を隠したのか、乗鑽院母子は慶長五年の関ヶ原役後に萩に移住したとある。

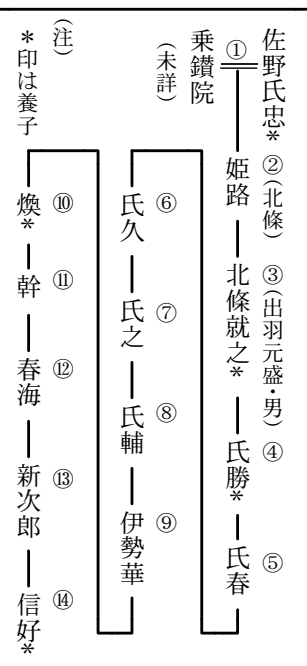
さらに、萩藩史料の『譜録』の「伝書」に、寛永二年八月十三日付の「北條後室賜之(中略)御配所付立百石、大津郡日置(へき)村之内」を示している。関ヶ原役の二十五年後である。

同じ萩藩の『関閥録』は、寛永十二年正月十七日に、北條長次郎就之が毛利秀就より伊織助の

名を賜り、同十九日に知行地に前記日置村の内、中村で百石を譲与せられ、出羽二郎左衛門元盛次男伊織(後に権右衛門)事、大方の養子になり「おひめ地と嫁宿被仰付候事」と記しているが、既に大方は他界している。

前述の『譜録』は、権右衛門就之は姫路の養子で、妻は市川九郎右衛門就貞の女とあり、両書ともに就之は延宝四年(一六七六)五十七歳逝去を記している。就之はこの没年齢から逆算すると元和六年(一六二〇)生れで、姫路が仮に天正十八年(一五九〇)生まれとしても三十歳の年齢差になる。従って、姫路の婿ではなく『譜録』が記す養子説を本稿も採用した。

姫路の結婚相手は判明しない。独身を通したとも思えないが、以上、佐野氏忠一家は氏直看免後、安芸の毛利輝元に預けられ草津(広島)に居住したが、間もなく氏忠は同地を去り河津で隠遁して死去。関ヶ原役で毛利



家が西軍につき萩に国替を命じられ、乗鑽院母子も萩に移り住み、そこで百石を与えられ姫路が養子就之を迎えたのである。

この就之を、黒田基樹氏と下山治久氏は毛利家家老の子としているが、同家史料にそうした記述はない。ただ、就之は主君毛利秀就からの偏諱であろう、それなりの家格は推定できる。

現在、萩の海潮寺に「伊勢氏墓地」の石標があり、「殊溪栄法大姉」と刻銘の乗鑽院宝篋印塔一基のみで、娘姫路の墓はなく整理されたのであろうという。

こうした論考から北條氏忠子孫が北條瀨兵衛で、幕末に「伊勢」に改姓したことが判明し、前頁の略系図も作成できた。

伊勢華と伊勢煥

資料は、乗鑽院を初代として九代目が北條瀨兵衛で、『三百藩家臣人名事典』等の伊勢兄弟の説明から二人についてまとめた。

九代 伊勢華(さかえ)

文政五年(一八二二)生れ、初名を織之助と言いつ天保元年(一八三〇)九歳で家督を継ぐ。同年亡父瀨兵衛氏輔の功勞によつて加増、百九石余となった。同十一年、北條瀨兵衛と改め、諱は氏華、一字名は華、号は萩八景の小松江に因んで小松などと称した。

嘉永以後、藩の要職につき国事に尽力したが、詩や書画を能くし、同志と嚶鳴社を結成し文墨に托して大いに国事を談じた。

文久三年(一八六三)、蔵本役兼大坂頭人(大坂留守居役)となり、情勢の探索・朝幕との折衝・諸藩への工作などに腐心したが、元治元年(一八六四)禁門の変後の七月二十二日、幕府に大坂藩邸を没収され帰国、謹慎した。

しかし、八月には赤間関都合役(下関代官)を命じられ、慶応元年(一八六五)表番頭格、同二年二月当職手元役になり、五月に幕府の追及を逃れるため、北條瀨兵衛は表向き死亡したこととし、姓を「伊勢」に改めた。

明治元年七月、新政府に召し出され奈良県判事、同二年倉敷県権知事に任じられ同県権令に進んだ。翌三年秋、伊勢は西江原村(井原市西江原町)法泉寺において祖先の追善供養を行い、同四年廃藩置県を機会に官を辞し萩に帰り、熊谷五一らと旧交を温め茶事や文墨に親しんだ。

法泉寺は備中伊勢家菩提寺で二基の室町期五輪塔が現存、伊勢盛時(早雲)と父盛定の墓と伝えられている。

明治三年は小田原落城(氏政・氏照没)後二百八十年に当たる。その後、明治十四年に宮内省京都支庁長を拝命し、同十九年

二月一日、六十五歳で京都東丸太町の寓居で没した。

京都の毛利家菩提寺紫野大徳寺塔頭黄梅院に葬られた。法名は虚懐小湊居士。『聖林唱和』『小湊遺稿』の著書がある。

同年三月、萩青海の家に親戚や故旧が百余人集つて慰霊祭を執行し、茶会を催し、追悼の詩歌を編集して小冊子『伊勢華』を刊行している。

十代 伊勢煥(あきら)

八代北條瀨兵衛氏輔の次男で文政十二年(一八二九)生れ、初名は源藏、慶応二年に兄と共に伊勢煥に改めた。字は章候、号は竹潭と言った。兄伊勢華の養子になり早くから蘭学を修め、江戸・長崎を往来し長崎伝習所で勝海舟と知り合った。

長崎から帰国の際、源藏は西洋新聞を持参してきた。

現在、萩博物館展覧会(昨年四月二十九日より本年九月四日まで)で展示されており、この新聞は勝海舟が訳したが、訳文がお粗末で読むに堪えないので吉田松陰が自ら訳し、松下村塾専用の

四百字詰原稿用紙に書かれていると説明されている。

万延元年正月、幕府がアメリカに派遣した新見豊前守正興の随行員として渡米した。萩藩最初の渡米者で、密航を企てた吉田松陰は前年の安政六年(一八五九)に処刑されている。

『万延元年第一遣米使節日記』(大正七年・刊)に記された乗組員名簿(左端、写真)がある。

外国奉行組頭・成瀬正典の随員とある。全乗組員七十七名中萩藩士は北條源藏のみである。

この時は咸臨丸の渡航が有名であるが、ポーハタン号の別船として訓練渡航したもので、外国には勝海舟を艦長に木村撰津守を提督として通訳の中浜(ジヨン)万次郎が押し通したという。同年十一月、北條源藏は萩に帰ると藩主毛利敬親・世子定広(後の元徳)に海外の事情を報告し、『米航誌記』を著している。

文久二年(一八六二)八月、蒸汽船購入用掛を拝命、横浜でイギリス商社から壬戌(じんにじゅつ)丸を買い入れた。当初、船長は山田赤介であつ

| | | |
|--------|----------|------|
| 外國奉行組頭 | 成瀬善四郎正典 | 三十九才 |
| 北條源藏煥 | (後伊勢ト改ム) | 三十二才 |
| 山田馬次郎 | 清樹 | 三十才 |
| 平野新藏 | 信成 | 三十二才 |

たが横浜から品川沖を回航した後、乗組仕官と山田船長の間に不和が生じた。仕官の井上馨らは藩邸に戻り周布政之助ら藩政府員に不平を訴えた。周布らは船内に出張して事情を審査し、山田船長を免じ井上ら乗組仕官も免じ、船将(船長)に北條源藏を任命している。

翌同三年六月には、武具方用掛を兼ねて周防柳井田鑄砲所長となる。さらに銃砲鑄造および火薬製錬二局の局長として、兵器の洋式改良に功績をあげた。

維新後も造船事業に関わって陸軍省に出仕。のち京都府に勤め明治五年に家を継ぎ、同十六年一月二十五日京都に没した。享年五十三歳。兄より先に京都黄梅院に葬られる。

伊勢華と木戸孝允は心友

『木戸孝允日記』は、明治元年(慶応四年)四月一日から同十年五月六日までの木戸の備忘録的記述で、主にその日に会談した人物名が記されている。

その訪問者は数えるに余りある。大河ドラマで知られた後藤象二郎や山本覚馬・楫取素彦等の名もある。その中で伊勢華の名が記された日数は二百二十五日と群を抜いて登場し、伊勢が木戸邸に泊まり、木戸の伊勢宿泊先泊も五十一日を数える。

慶応四年四月十一日に伊勢が上京、七月二十八日に奈良県判事を拜命し八月三日に帰郷している。翌明治二年三月に木戸が奈良を訪れ「廿五日、四時過奈良に至り清水町伊勢氏の寓□□屋に宿す」とあり、さらに、「同廿八日、小組も浪華へ歸る(小組は浪華南地の妓伊勢氏七、八年前の知己、就中嫁于他頃日又爲妓來て伊勢氏の寓にあり、不圖相會余亦舊知也)。小組は伊勢の妻ではないだろうか(伊勢に子供はいはが妻は未詳)。木戸の妻も京都の芸妓幾松である。

その後四月九日に伊勢が上京、七月十六日は木戸が宿所を訪ね、大村益次郎も同席している。「終日閑談、圍碁小酌至子夜七字(時)過歩月て歸る」とある。

翌日、伊勢は倉敷県知事を拜命。同二十一日木戸は政府に温泉行願書を提出、八月一日から二人は箱根に向い、三日には馬車を雇って小田原に至り、翌四日同道して早雲寺に來ている。

「今日、伊勢、早雲寺に至り早雲其他の墓を拜す、余も亦共に至る。畫像重器等を見る。早雲の畫像一幅最古物にして、筆刀形容尤可見ものあり。伊勢と相別る。於東京屢相往來し一舊知の翁なり。途中戯に小憩ことに碁を争ふて路中の難をしらず。則今一

別離友情の又不得忘ものあり

(木戸孝允日記)

八月十五日が早雲の命日で、この年は没後三百五十年である。

伊勢とは東京で屢々往來する「旧知の翁」とある。屢々どころではない。近くにいれば毎日とも言える程である。翁とあるが明治元年で伊勢四十六歳、木戸三十五歳の十一歳違いである。書翰では「伊勢老」とも記し、「翁」や「老」は年長者に対する敬称であろう。文墨や書画骨董の趣味に碁友でもあった。

木戸の多くの訪問者は、各々目的あつての会談と思えるが、伊勢との交際は心友と見た。

維新後の木戸は、劍豪桂小五郎とは全く異なる印象の政治家で、前記箱根行も参議辞任を秘めての旅で、この後、暫く箱根芦之湯の松坂屋に滞在し、九月になると三島から小田原・曾我を訪ねて九月二十一日に小田原を発ち帰京している。

余談になるが、小田原での訪問者に家老大久保将監・大久保彌右衛門・加藤孫太夫・正木権太夫・吉岡織衛に本陣久保田甚四郎と松木長右衛門や中垣齋宮、柏木忠俊らの名がある。

なお、伊勢華の弟伊勢煥の木戸邸來訪や、木戸が伊勢煥を訪ねた記述も合計七回ある。

後記

伊勢家十一代の伊勢幹は、九代華の長男。十二代伊勢春海は、幹の長男。十三代伊勢新次郎は、幹の次男で大正十五年に宇都宮市に転居。十四代伊勢信好は、新次郎の一女光子の婚で栃木県塩谷郡高根沢町に居住している。昭和五十二年、初めて萩で墓参をされたと記している。

今回、千葉直重と佐野氏忠の子孫が北條から伊勢を継承し、伊勢平氏や備中法泉寺の先祖供養と早雲寺墓参の記述は、近年まで俗称された早雲の伊勢浪人説を完全否定するものである。

また、図らずも何人かに出奔または現状逃避願望の内面の弱点が垣間見られた。伊勢華は明治四年から十年間無職、木戸は同七年五月に参議を辞任、翌八年二月に復歸するが同九年三月に四十三歳で退任している。

両者にも内面の弱さが窺え、それをお互いの交友が補い合っていたように思えてならない。

『木戸孝允日記』の他、『木戸孝允文書』等から、伊勢華宛木戸の書翰二十通も拝読した。両書等から見た二人の心友としての交流は、またの機会に稿を改めて記したい。

小田原の小西薬舗

話し手 小西 正樹さん

初代は次郎左衛門

うちの一番もとは関ヶ原で首切られた行長の弟で、堺で商売やっていたんですが行長が打ち首になったので、普通は家族全員打ち首になるらしいんですけども、うちの先祖は高野山で禊(みそぎ)をして小田原に来たって言われています。

初代は次郎左衛門です。それを寛永十年(一六三三年)に二代目が受け継いだということですが、小田原は大きな地震があつて、親父の話では関東大震災の時に、紙の書類はほとんど駄目にしちゃったんですよ。

明治時代の十一代目正蔭さん(明治二十四年没)が書いた本(系図)があるんです。おじいちゃんの後から足したみたいですね。もう虫が食っちゃって、それで製本しなおしたんです。最初は本当にぼろぼろでした。

「街かど博物館」

「街かど博物館」やっつてるんでパンフレット見てそれでぶらっついたらっしやる方もいますよ。薬品会社の看板ですか。上の

ガラスは戦前じゃないかな。科研だとかエーザイとかは色が綺麗ですね。看板屋さんへ書き換えてもらうんです。私、あのガラスが下にあつたときに、けつとばして足を怪我した覚えがあります。

葉の入れ物(木製の引き出し)は、これ全部現役です。これがマタタビで、ドクダミも医薬品とお茶になっていのあるところなんです。私のところでは最近のお医者さんの処方もやっていますし、普通の薬局と全く同じです。

「内務省免許薬舗小西」の看板は、明治の時最初に出来た薬局を取り締まるのが内務省だったんですよ。

うちは、そこらへん引っ掻き回すとそんなもんばかり出てきます。これは乳鉢で棒が重いんですよ。漢方の系統は鉄をいやるんですよ。天秤にこれが膏薬練り板。大正二年、親父が生まれた年に作ったんですよ。これは煎じる道具。ピペット入れや携帯用の注射器とか、科学に興味がある生徒さんはとても喜ぶます。

薬の卸をやりました

昔は卸をやってたんです。小売じゃなく卸が主だったもんですから、メーカーさんは取引先なんです。昔からあるのはうちと桔梗屋さんです。

卸す先がお医者さんで、一番向こうは熱海が少しあつて、御殿場は行つてなかつたですね。伊勢原から平塚、あのへんまでです。そこへ御用聞きに行つて注文受けて次の日に持つて行くとか、今みたいに電話は使わなかつた気がします。

今宮さんにも、お堀端の津田さん、木戸さん、南町は路地ごとに一軒ずつお医者さんがありましたからね。高橋さん、オートバイでよく来た田中先生が来られたな。

安定していた商売が崩れたのが、名古屋から来たスズケンや



中北が強かつたんですよ。中北が緑色のオートバイ、スズケンがブルーのオートバイで、昭和四十年よりもっと前でしようね。最初は三島が拠点で、箱根をオートバイで越えてきた。ちっちゃな地域の卸は扱ひ量も少ないから、大手が来たら太刀打ちが出来ないんです。

製薬会社と一緒にないと問屋も一緒にならないといけない。系統があつて、問屋で武田と三共両方やっているのは少ないんです。関西系の武田と東京の三共と今でも扱わない問屋さんがありますよ。うちは昔から両方で、そういう問屋さんの営業マンが来て、私は子供の頃から飴持つてきてもらつたりしたことがありました。

漢方

漢方は一番湿気やすいから扱ひが大変です。そのうえ、煎じるのは家中が匂つちやつて嫌という方が殆どなんです。ものによつては日本じゃ採れないものもあります。

ドクダミは便秘とかに効きめがあるんですが、でもこれだけは分らないんです。地域によつて全然違う飲み方するんですよ。また漢方は症状が同じでも漢方で見ると体質が違つて薬がまるつきり違うんです。

祖父、父母、私

うちは寛永の頃からずっとこの場所で商売していました。北東(良)の角は鬼門だからと他人に譲って、この屋敷には北東の角がないんです。

うちには小田原用水が屋敷の中を通っていました。飲み水には井戸が二つあって、それを使っていました。

正蔭さんのあとが正寛。この人は『小田原案内記』という本を出しています。明治の中頃に郵便局やったり銀行(小田原通商銀行)をやっていました。「湖梅」という号で漢詩もつくっています。

そして正和。おじいちゃんです。私知っていますくらいです。戦後まで生きていました(昭和二十二年没)。知っているからって、私が小さい時に亡くなっただけは覚えてます。

親父は正通。大正二年(一九一三)生まれで、平成八年十一月に八十三歳で亡くなっている。口の多い人じゃなかったから、なんにも言わなかったですね。

母(賀野子さん)が大正四年生まれです。座間から嫁に来て、おおらかな人でした。親父の一と月後に亡くなりました。

私の子供の頃はここへ住み込みで店員が四人だか六人いました。台所が広がったです。女中

部屋とこつちには店の人の部屋がありましたね。

配達には、私知っている範囲では山北まで自転車で行ったとか聞きました。

暖簾分けは何軒かあるみたいですが、みんなやめちゃいましたね。新宿が一番最後まで小西屋鈴木薬局といってやりました。

私は昭和十九年(一九四四)生まれ、本町小、城山、小田高の卒業です。自分が後を継ぐという暗黙の了解で、東京薬科大学、あの時は四年間、今は六年間です。

最初は栢山で店出してもらって、ゼロから自分で立ち上げました。友達が空き店舗があるからやらないかと、そんな難しいこと考えなかったですよ。家内(紀子さん)と結婚したのは栢山の頃です。

そこで十年やって、それから旭丘高校の前で約十年。父が亡くなって両方は無理なので旭丘高校の前を閉めてこちらにきました。

国の登録文化財

この建物は、大正十四年(一九二五)頃に建てたもので、前の店の材料の一部に使っています。うちと「だるま」さんと江島さんと、みんな関東大震災で壊れて建て



直してそのまんまなんですね。

蔵の梁に明和という年号が入っているんです。ですから江戸時代じゃないですか。この蔵の扉、まだ動きますよ。

街かど博物館が平成十年(一九九八)、国の登録有形文化財が平成十四年です。

先日「おだわら雛道中」のひとつとしてこちらにお雛様を飾っています。

これが私のおばあちゃんのお雛様(明治中頃)、これが母(大正四年)で、こちらは女房(昭和二十五年)と娘(昭和五十年)のです。

普段は茶箱に仕舞ってありますが、こうして年に一度のお披露目も、まあ虫干しですよ。

(平成二十八年二月十三日)

絵 田中豊

聞き書き 青木・松島

お知らせ

荒河 純 理事が「温故知新・小田原桐座」と題して講演します

「小田原桐座について一由緒書の検討を中心に一」を連載中の荒河 純 理事が小田原市役所文化政策課主催の第10回文化セミナーで下記により講演します。

会員の方も是非ご聴講ください。なお、本講演は7月5日(火)の松竹大歌舞伎公演(小田原市民会館大ホール)に伴い実施されるものです。

講演日時 6月26日(日) 14時~16時半 入場無料(申込不要)

場所 小田原市民会館 第6会議室

大久保宗家六代忠増第三番目の夫人、 寿昌院(喜与姫)

野村 武男

はじめに

武蔵国多摩郡百草(もくさ)村(現東京都日野市百草)に享保二年(一七一七)、慈岳山(しがくさん)松連寺(しょうれんじ)を中興開基した寿昌院慈岳元長尼は大久保宗家六代加賀守老中忠増の三番目の夫人喜与姫であった。

時の幕閣老中ともあろう方の夫人がなぜ小田原や江戸から離れたこの片田舎に、しかも大久保家の菩提寺でもない黄檗宗(おうばくしゅう)のこの小さな寺に葬られたのか。

これだけからでも推し量られる寿昌院の数奇な人生を、さらに驚かす事実も含めて、概要を紹介する。以下、多くは拙著『寿昌院と智光院』を基にしている。

寿昌院出自

父は「向井三左衛門光次」であり、武田家没落後家康の船手頭となつた向井兵庫頭の末流曾孫である。記録ではこのとき年人(浪人)とある。

寿昌院はおそらく延宝五年(一

六七七)、向井光次の最初の子として生まれた。弟が二人居り、下の弟は養子に出ていたが、上の弟が早世したため、寿昌院の尽力で向井家に戻り、のち大久保家の家臣となり、幕末まで続く。

忠増の奥へあがる

忠増と寿昌院が出会う道筋は不明である。筆者は、向井宗家の子女が嫁いだ水戸の付家老中山家と忠増の父忠朝の妹清法院の嫁いだ旗本中山家を介してのものであると推定した。この中山家とは、北条氏照の家臣中山家範の息子たちの流れのものである。中山家範は天正十八年(一五九〇)の秀吉による北条攻撃の戦で八王子城で戦死しており、のち息子たちは家康の旗本と水戸家徳川頼房の付家老で笠間藩主となつた。

寿昌院は元禄四年(一六九二)、おそらく十五歳で、忠増三十六歳のもとへあがつた。

その時の大久保宗家奥の状況

忠増は十三歳で將軍家綱に初御目見得であつた。十五歳のとき父が大久保宗家四代でいとこの忠職(ただもと)の養子となり、宗家を継いだことから大名の嫡子となつた。早速従五位下安芸守に叙任され、その後奏者番・寺社奉行を経て若年寄に昇任し、隠岐守とし、名前も忠能から忠増と改めた。しかし若年寄をわずか一年弱の元禄元年(一六八八)八月に辞し、五年前に賜つた一万石の所領も返上している。したがって寿昌院が来たときは、部屋住みの身分であつた。

寿昌院が奥に入った時は、忠増二十二歳の延宝五年(一六七七)に結婚した正室、松平下総守忠弘の三女で家康の血を引く光昭院(千代姫)はずでに十一年前に亡くなつており(図2参照)、その一人娘千佐(①)以下○数字は図2の数字を表す)も八年前に亡くなつてゐる。そのため二番目の夫人、継室で大久保家臣石井清右衛門政茂の娘松久院(留姫)がいた。継室になつて

すでにほぼ十年経つており、年齢は二十五歳であつた。松久院はこれまでに五人の子を成したが、いま育つてゐるのは七歳の娘岩姫(③)と三歳の男子幸麻呂(⑤)である。この幸麻呂も身体が弱かつたため、寿昌院が来たときは世

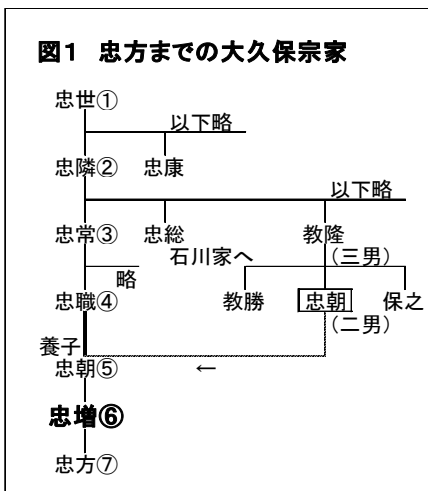
継ぎ誕生問題の解決が急となつていたときのものである。

忠増の父従四位下加賀守忠朝は老中であり、封地は唐津・佐倉を経て、五年前の貞享三年(一六八六)十万三千二百二十九石余で、小田原へ移つてゐた。

松久院と寿昌院の「出産競争」松久院と寿昌院二人が出産を競争したとは思えないが、結果からみるとそのように感じられるほどである。反対に忠増から見ると、ある時までは比較的二人を分け隔てなく子を成さしめていたように思える。以下やや複雑であるため、図2を参照しながらお読みいただきたい。

寿昌院が来てのち、まず松久院は忠増の六番目の子寿光院(⑥)を産んだが、この子はすぐの元禄四年(一六九二)一月十二日に没している。

図1 忠方までの大久保宗家



忠世①
以下略
忠隣② 忠康
以下略
忠常③ 忠総 教隆(三男)
石川家へ
忠職④ 教勝 忠朝(二男)
養子
忠朝⑤
忠増⑥
忠方⑦

次は詳しくはわからないが、寿昌院が大久保家に入つてすぐの元禄五年一月一日から六月七日の間に生まれた男子がいる。元禄五年六月七日に没した本光院(7)である。翌七月朔日には幸麻呂も四歳で亡くなった。次は、のちの大久保宗家七代忠方(伝吉郎)(8)が松久院二十歳から生まれた。次に元禄六年(一六九三)四月から八月までの間の誕生および没と考えられ、母親も不明の男子(9)がいる。

次の忠増の子十番目は寿昌院から生まれた。元禄六年八月五日、十七歳の寿昌院二番目の男子総陽(ふさはる)(六五郎)(10)である。忠方と一年二ヶ月しか違わない。忠方にもしものことがあれば、世継ぎともなる。しかし総陽はのち忠増が亡くなる少し前に、大久保家二代忠隣の子男忠総が継いだ石川家の、その時の当主で奏者番のち寺社奉行・若年寄・御側御用人となる総茂の養子となり、播磨守下館二万石城主となる。

そして次は再び松久院からである。元禄七年(一六九四)八月十九日、松久院二十八歳から娘亀姫(のち勝姫と改称)(11)が生まれたが、病弱であったためか早くから父や寿昌院の影響で黄檗宗門に入り、慈仙院長

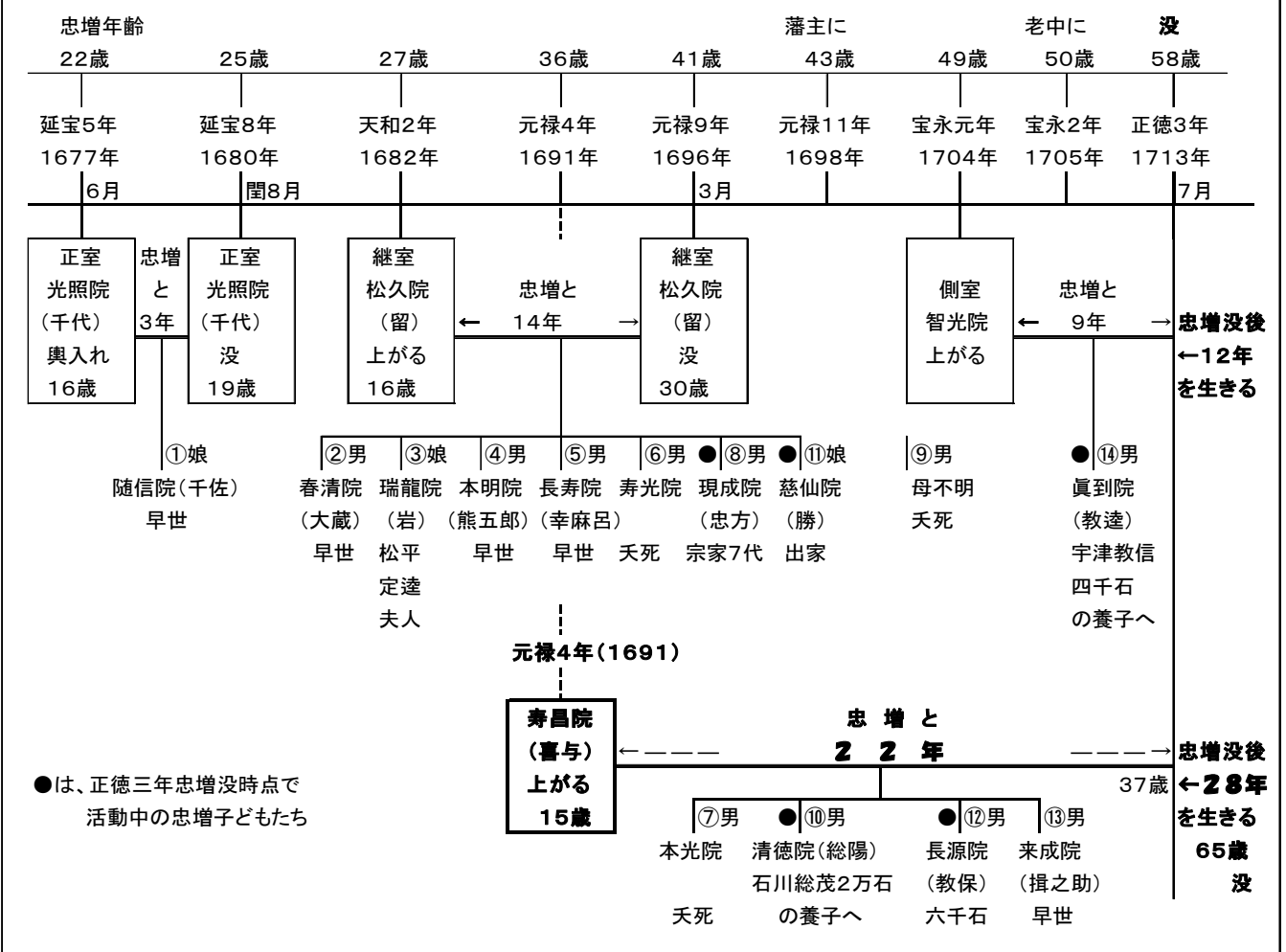
寿元栄を戒名とした。享保十年(一七二五)七月二十五日、三十二歳で亡くなっている。墓は父母と同じ江戸青山(現在世田谷区に移転)の教学院にある。

松久院は勝姫を産んだ二年後の元禄九年(一六九六)三月三日、三十歳で没するが、寿昌院はその後元禄十年(一六九七)三月十一日、教保(七十郎)(12)を儲けた。教保はのち武蔵国多摩郡百草村に宇津采女正教賢として名を今に残す人物となる。

さらに元禄十四年(一七〇一)八月八日寿昌院は、男子揖之助(13)を産んだ。教保が生まれてから四年経っている。松久院と比べると子供を産む間隔は長いし、子供の数も少ない。寿昌院の産んだ子はすべて男子であった。揖之助は翌年八月二日、二歳で早世した。

松久院がその後も長く生きていけば、忠方出産によつてよう

図2 忠増の夫人たちとその子どもたち



やく丈夫な男子を産み、自分の役目を果たせたと喜んだだろう。反対にたぶん世継ぎの誕生を望まれてきた寿昌院にとっては残念な思いもあったかもしれない。しかし松久院没後、寿昌院の運命は大きく変わっていくこととなる。

松久院死去に伴う寿昌院の忠増への不信

松久院が三十歳で亡くなった元禄九年(一六九六)は忠増四十一歳、寿昌院二十歳であった。松久院の墓は教学院にある。墓塔銘は、「松久院殿妙長日榮大姉」。「教学院過去帳」ではもう少し詳しい。松久院殿妙長日榮大姉 第六世後室留 寛文七年生 死亡元禄九年三月三日三十歳」とある。

松久院は十六歳ごろ忠増のところへ上がり、最初の子を天和三年(一六八三)四月に産んでから勝姫を産むまでの十一年四ヶ月間におそらく七人の子を生み、また後の藩主忠方を儲けた功績を持った。これらのことや以下のことから彼女はいかに忠増から愛されていたかが伺える。

と同一となりたい、という意味のことを書いている(木口氏・菱山氏「百草園 松連寺寿昌院」)。

もうひとつはその大きな墓塔とその銘にある。大名の夫人であり、嫡子の実母であることから立派であることは当たり前のことであろうが、墓塔の大きさは宗家五代・老中であった舅忠朝や夫で老中ともなる忠増のそれと同じくらいかそれ以上とも思える。ところがさらに夫人の墓では珍しいと思われるが、墓塔背面に夫人を讃える忠増の言葉と詩を合わせて漢字二百四十五字がびっしりと刻まれている。「松久院は武蔵國の出身で、性質は人にやさしく、夫を敬い、終身慎み深かったが、早くに亡くなった」等と松久院を褒め称えている。亡くなったことがよほど悲しかったと推し量られる。それに加えて愛情と、ある種の尊敬を込めた銘である。

これらのことはまだ若く、忠増のところへ上がってから日も浅い寿昌院にどんな思いを与えたであろうか。どんなにか口惜しい思いや妬みがあったのではないだろうか。忠増のところへあがった目的が世継ぎを儲けることであれば、それはなおさらである。松久院が嫡子を産み、そして子は健康に育っている。近年の江戸時代庶民についての

研究からは、妾や正妻への「妬み」などについて結構自由な考えを持っていたと言われるようになった。しかし武士階級特に大名家ではかなり徹底的にそういう感情を起さないように教育されている。そうは言っても、心を抑えてはいても、そういう思いはあったかもしれない。これ以後の寿昌院が辿った道、特に忠増死後の彼女の生き方に、もしかしたらこのことも影響を与えたひとつだったのではないかと想像させる。

反対に松久院側から言えば、自分というものがいるのに、若い側室を入れて、自分がまだその時までできていなかった嫡子誕生の榮譽を獲られるのではないか、という思いが湧きあがっていたかもしれない。

寿昌院の立場上昇の軌跡

寿昌院は実子総陽に加え、松久院の産んだ嫡子忠方五歳などの母となった。これで側室の身分から急激にその地位を高めた。こうして彼女は忠増の「後御室」と称されるようになった。

忠朝は元禄十一年(一六九八)二月、老中職を辞し、さらに十月に隠居した。忠増は宗家六代となり、寿昌院はこれで藩主夫人となった。先の夫人二人が早

くに亡くなっているため、夫人としてははじめての藩主夫人となり、実質的に正室と同じくらしい地位を得たことになる。

さらに忠増は元禄十三年(一七〇〇)十二月、従四位下に昇進し、宝永二年(一七〇五)九月、老中となり、隠岐守から加賀守に改め、十二月には侍従にもなった。寿昌院は俗世間的に言えば、地位的・経済的・名譽的に最高の老中夫人になった。さらに宝永二年前後に忠増は新たに側室、のちの智光院を置いたことにより、寿昌院は相対的にもその地位を上げたことになる。もともと智光院の出現には、小田原大地震や富士の大噴火の被害の後始末に追われる忠増の心に、寿昌院との距離がいくらか遠のいたことにより与えられなかった「癒し」の替りになるものだったかもしれない。智光院は男子一人教達(寛之助)⑭を儲けている。教達(のりみち)は六歳の時、忠増弟宇津教信の養子になった。

これまでも寿昌院は教奇な運命を辿ったと言える。しかし忠増没後での人生は自らの望むものであったが、さらに教奇なものとなった。

寺院開基

忠増は正徳三年(一七一三)七月、五十八歳で亡くなり、寿昌院

(戒名 慈岳元長)と智光院(戒名 慈円元明)はそれまで望んでいたであろう出家をし、尼となった。松久院の最後の娘、勝(慈仙院長 寿元栄)が出家したのも同じころである。さらに寿昌院の下の息子 教保(長源院劫外元春)も同じ時に戒名を得ている。そして小田原領とは関係のない百草村に黄檗宗の寺、慈岳山松連寺を享保二年(一七一七)に開基した。同地の無住となった寺を紹介したのは、石川総陽の養父石川総茂が寺社奉行をしているときであったため、おそらくそこからの情報によると思われる。また黄檗宗であったのは、夫忠増が黄檗宗の福聚山慈眼寺を小田原谷津に小田原地震のすべての犠牲者を供養するため創建していることと大きく関係している。

寿昌院がなぜ寺を開基したのか、なぜ教学院ではなく、この田舎の小さな寺に葬られることを希望したのだろうか。多くの理由があると考えられる。その一つに前述の忠増への不信もあると思われる。また仏への信心が大きかったのであろう。夫の没後供養での開基ではないようである。

この寺の中興の目的は「信康の追福」と言われている。信康は徳川家康と駿河御前(築山御前)との間に生まれた長男で、謀反

の疑いから時の大久保宗家初代 忠世の預かる二侯城で自刃している。信康自刃から百四十年も経ち、また他家から来た寿昌院がなぜ、という疑問がある。「百草園 松連寺寿昌院」を書いた木口氏・菱山氏は信康追福目的を否定している。しかし大久保家は信康のあの事件に、一般に知られている以上に大きく関わっていたことから信康追福目的であっただろう(拙著『家康長男信康と大久保家の謎』参照)、と考える。初めの享保二年の中興は寿昌院の「養い子」である忠方の希望に沿って、家康長男信康の追福を目的としたが、四年後の享保六年(一七二二)の再中興の時は、寿昌院・智光院の希望により仏法僧への信心からとした。

寿昌院と忠増第四番目の夫人智光院

寿昌院が二十八歳のころ、前述のように忠増の第四番目の夫人として智光院が上がってきた。寿昌院と松久院の仲は不明であるが、智光院との、後の人生の一端から見ると、仲が良かったように思われる。寿昌院が百草の松連寺を開基するとき、おそらく共にそれに寄与し、また黄檗宗の戒を同時に受け、また同じ寺の尼として過ごしたようである(『石坂一雄家文書』)。智光院

は早くに亡くなり、寿昌院の計らいでこの寺の墓地に葬られた。墓塔銘は「智光院慈圓元明大禪尼之塔」である(注:「殿」字はない)。この墓地はその時、新しく寺の隣の村人の土地を買い上げて、造られている(『石坂一雄家文書』)。この墓の主はこれまで全く知られていなかったが、近年筆者によつて明らかにされ、寿昌院を知る日野市の方々は、非常に驚いた。老中忠増の二人の夫人がここに仲良く並んで葬られていたのであるから。

寿昌院の示寂とその後

寿昌院は江戸屋敷に住みながら行程約八里の松連寺へ通っていたと思われるが、おそらく晩年は寺に、あるいは近くに常住するようになったと思われる。おそらく松連寺の五代目住持の時の寛保元年(一七四一)七月三十日に示寂した。六十五歳であった。墓塔銘は

正面 「當山開基 壽昌院殿 慈岳元長尼禪師」

右側面 「寛保元辛酉七月三十日逝」

松連寺創建以来明治二年(一八六九)まで大久保家から松連寺への扶持四十八俵があった(ただし明治二年は十六俵三斗六升)。松連寺八代住持が「松連禪寺之碑」を建てたにあたっては、現小田



旧松連寺墓地の一部
囲いの中が寿昌院の墓塔、左端は智光院の墓塔
囲いの石柱に大久保忠一子爵の修繕の銘がある



寿昌院墓塔

原市寿町に大久保忠真が建てた「神祖大君宮址碑」の銘文を書いた小田原藩士で百石の家臣岡田左大夫光雄が撰文および篆刻をしている。また松連寺への大久保家からの毎年の代参があり、明治三十五年(一九〇二)には大久保忠一子爵による寿昌院の墓などの修理がなされている。さらに寿昌院実家向井家からの毎年の参拝や、智光院実子の宇津

家からの毎年の供養の賽銭もあった。

おわりに

老中夫人でありながら江戸を離れた小さな田舎の寺に葬られるようなことも含めて数奇な人生を送った寿昌院についてその概要を示した。しかしこの松連寺に対し、大久保家はかなり手厚い扶持を出し、また中興時には藩主忠方による仏殿・庫裏・梵鐘などの寄進、寿昌院実子教

保による八幡宮の本殿・拝殿の寄進もあった。

江戸時代中期のあまり取り上げられない時代や大名や元側室に對してこのような記事が書けたのは、ひとえに寿昌院や智光院が黄檗宗の寺院を中興し、その墓地に葬られ、彼女らの墓塔が残っていたからである。

(筆者 東京都日野市在住)

参考文献

「百草園 松連寺寿昌院」木口一・

菱山泰一

『多摩のあゆみ』第三十四・三十五

昭和五十九年(一九八四)二月十

五日・五月十五日 多摩文化資料

室編 多摩中央信用金庫

『老中夫人 寿昌院と智光院 謎

を追って、相州小田原・武州百草・

そして黄檗へ』野村武男 二〇一

三年(平成二十五)三月一日 日

本文学館

なお、この本が出される前の寿

昌院に關しての論文等は、上記

木口氏・菱山氏のもの、小田

小田原桐座について (五)

―由緒書の検討を中心に―

荒河 純

四、小田原桐座の横浜進出

(一) 由緒書の記述

前回は、江戸時代後期の大橋家、桐家の当主であった大橋四郎治義友の芝居禁止令への対応について述べたが、今回は同じ大橋義友の開港間もない横浜への進出について述べる。

安政五年(一八五八)六月、日米修好通商条約が締結され、一年後の横浜開港が決まった。横浜開港を知らせる江戸町触が出たのが

その年の十二月、開港場への出稼ぎ、移住、貿易を許可する老中達書が出たのが翌正月のことである。ほとんど何も無いところに横浜の港と街を、実に半年で建設するという突貫工事であった。その新開地横浜に進出すべく、義友と桐尾上は、安政六年(一八五九)五月に外国奉行・村垣淡路守に願いを提出し、同年七月に弁天通りに五十間四方の土地を拝借、間口十五間奥行き二十三間の大きな舞

台小屋の建設を許可されていることが、由緒書に記されている(1)。

安政六未年五月武州神奈川横浜ニ於テ外国交易開港ノ節諸國ヨリ諸商人出稼ノ儀仰渡サレ候ニ付追々諸國ノ平民群集開店ニ付広大ノ繁昌ニ相成ル依之此度我等先祖ヨリノ由緒書并古例出稼興行ノ件ヲ以テ横浜表外国奉行村垣淡路守様へ願上候処同年七月願濟ノ上新地拝借致シ候則旧弁天通ニ於テ五十間四方ノ地ヲ拝借仕右場所ニ於テ表間口十五間奥行二十三間ノ舞台小屋取建常芝居興行可致之所小屋普請金主半途ニテ異変ニ相成依之右ノ拝借ノ地所其儘上地ニ致候

原史談会石井啓文氏の「解けない歴史の謎」岡崎信康追悼の松連寺再建」『扣之帳』第十号 二〇〇六年(平成十八)三月二十一日がある。

『家康長男信康と大久保家の謎』野村武男 二〇一六年(平成二十八)三月一日 日本文学館 『石坂一雄家文書』日野市石坂一雄家に伝わる江戸時代から明治時代初期までの各種文書の写

この文書を要約すると、「横浜に大きな舞台小屋建設を計画し、その許可も取ったが、資金が不足したため結局断念した」ということになる。これまでの桐座に関する先行研究でも、「(前略)どうやら金主(スポンサー)に異変があった、途中で出資をやめてしまったらしい。挙げ句の果てに義友は拝借地をそのまま返納することとなり、横浜進出は失敗に終わった」(2)とか、「(前略)予定していた建設資金調達途中で行かなくなり、ついに横浜進出を断念せざるを得なくなってしまう」(3)など、簡単な記述で済まされている。

しかし、幕末という困難な時代に、ここに書かれているような規

模の大劇場建設を構想し、しかも幕府の許可まで得たという点と自体驚くべきことである。長年にわたり小田原で地道に舞台を続けてきた桐座(大橋家)にとって、座の命運を賭けた一大事業であったはずである。

それにしては、義友の息子である大橋林当によって書かれたこの由緒書の記述は、余りにも簡単過ぎはしないか、大いに気になるところである。そこで、この由緒書に書かれた記述を基に、一つ一つの事実を検証してみることにした。

(二) 横浜芝居事始と下田座

本題に入る前に、開港当時横浜の芝居小屋に関する先行研究について述べる。開港時横浜の芝居事始は下田座であるというのが定説となっている(4)。近年、斉藤多喜夫は、下田座が文久元年(一八六一)九月から始めたとする従来の説に対し、同じ下田座が安政六年十月には興行を始めていたと述べている(5)。しかし、横浜の芝居史に関するこれまでの著述には、小田原桐座に関わる記載は全く見られないのである。

下田座を開いた下田屋文吉は、横浜に近い神奈川宿で旅館兼料理茶屋を営業していた商人である。文久二年刊の『横浜は

なし』によれば「台町料理茶屋には松本屋、下田屋、佐くらや、石崎屋、此前に清水山天満宮あり」と書かれている(6)。また、安政六年制作の『横浜御貿易場大絵図』にも、開港地横浜の対岸に描かれた神奈川宿の旅館の一つとして下田屋が表記されている(7)。

では、下田屋はいつ頃横浜に進出し芝居興行を始めたのであろうか。『横浜沿革史』文久元年(一八六一)九月条に「下田屋文吉始メテ芝居小屋ヲ建築セン事ヲ請願スレトモ芝居興行ヲ許サス、因テ子供手踊ト換ヘ請願、許可ヲ得テ小屋ヲ建築ス、下田座ト云」とあり(8)、これが文久元年説の根拠となり、『横浜市史稿』、『横浜歴史年表』などもそれを踏襲している。

これに対し斉藤は、三井商店横浜店の手代が安政六年(一八五九)十一月中旬、本店に送った書簡集(『永書』)の中にある(9)、「当地壹丁目裏通り江先頃より芝居普請出来、先月中頃より相始メ候得共、何れも旅役者計、其上直段割合高値ニ付、一向不入之趣」という文章から、下田座の興行開始は『横浜沿革史』にある文久元年(一八六一)より以前の、安政六年(一八五九)七月初旬で、その頃から小屋の普請を進めて十月には落成、旅役者の一座で舞台開

きを行ったとしている。

また、「安政六年現在横浜町居住商人配置図」の二丁目の海辺通に下田屋の名があること(10)、万延元年の五雲亭貞秀が描いた横浜絵図「横浜本町景港崎街新廓」の中で(11)、二丁目の海辺通に当たる位置に明らかに芝居小屋が存在していることから、それが裏付けられるとしている(図1)。

ここで、斉藤説における場所的な矛盾を指摘することができ。すなわち、三井の手代が見たという「壹丁目裏通り」というのは、先の安政六年の商人配置図において下田屋の位置を示す「二丁目海岸通り」とは明らかに異なっている。また、三井の手代は「下田座」と

明記しているわけでもない。また、先の『横浜沿革史』に記されているように、この頃の下田座は幕府の正規な許可を得ておらず、芝居に対して制限の厳しかったこの時代に、はたして正規の鑑札無しで興行が出来たかどうか疑問もある。

これらのことから、三井の手代が見た芝居小屋は別物であった可能性が高い。先の斉藤

説では、下田座の興行開始は十月としているが、それは三井の手代の記録が根拠となっているので、これが上記の理由で間違っているとしたら、実際には何月頃のことであろうか。

それを明らかにするために、下田屋が横浜に進出した動機と時期を考えてみる。安政六年六月に制作された『横浜町割図』の中に下田屋の名前は無い(12)。また、下田屋にとって極めて関係の深い出来事として、安政六年七月一日に神奈川宿の飯盛旅館の営業禁止令が出されたことである(13)。これは、東海道筋における外国人とのトラブルを避けるためとは

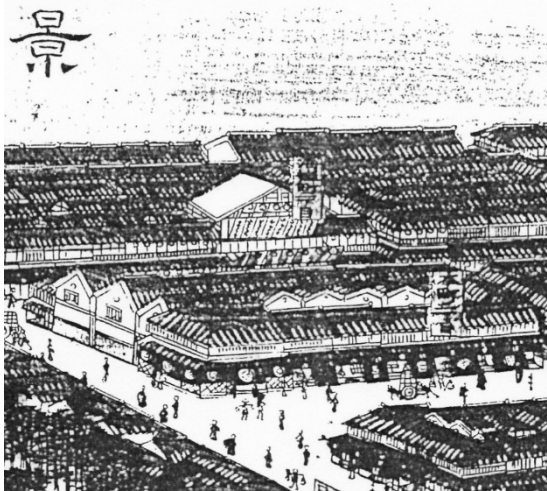


図1 「横浜本町景港崎街新廓」・万延元年(注(11))の一部

いえ、神奈川宿の商人には死活問題であった。また、横浜の港崎遊郭が完成するのは十一月であるが、その前の六月十日からすでに、大通りの東側にあたる異国人屋敷予定地に、仮の遊郭が営業を始めており、既に人の流れは急速に横浜へ向かっている状況であった。

下田屋文吉はこの段階で、これからは神奈川ではなく横浜だと判断を下し、七月には土地を確保し、取り敢えず角力、人形芝居のような簡単な興行から始めたものである。これは、斉藤も指摘しているように、三井商店によって描かれた地図である『開港当時横浜ノ図』の二丁目新通(北仲通)と川岸通(海岸通)の間に、「人形芝居・馬芝居・力持、七夕より相始メ申候、但芝居ハ普請中ニ御座候」という付箋が貼られていることから推定されるのである(14)(図2)。

二丁目新道
間口十五間 人形芝居地所
同

十五間 曲馬地所

神奈川
願人 文吉

一丁目うら町
芝居地所
間口

これは、二丁目新道に人形芝居と曲馬のために神奈川の(下田屋)文吉が各十五間ずつの地所を確保し、それとは別に一丁目裏町に別な誰かが芝居地所を確保したことを示している。

これらのことから、二丁目海岸通では、安政六年七月頃から下田屋文吉が小規模な見世物興行を始めていたことはほぼ間違いないと考えられる。では、一丁目裏通り(うら町)には誰が「芝居地所」を確保したのか、そして三井の手代が見たものは何であったのだろうか。それらを明らかにするのが次の課題である。

(三) 常芝居取建願書

先ず由緒書の記述にあるように、大橋義友と桐尾上が安政六年(一八五九)五月に外国奉行・村垣淡路守に願いを出し、同年七月に舞台小屋の建設を許可されたということが事実かどうかを確かめる必要がある。

これに対応する公式文書を探したところ、神奈川県史料資料篇の中に『横浜表御用留抄』より引用された「安政六年開港場へ

歌舞伎芝居取立につき外国奉行伺書」を見出した(16)。しかし、この文書には誰が芝居興行を願ったのか記されていない。そこで、更に調査したところ、内閣文庫、『横浜開港始原』坤の中に、桐尾上と大橋四郎治の名前のある「御開港場江歌舞妓芝居取建候義申上候書付」という安政六年四月付の外国奉行の文書を見出した(17)。また、これと同じ内容の文書が、大日本古文書の『幕末外国関係文書』の中に収録されていることが分かった(18)。以下にその全文を読み下し文にして載せる。

御開港場へ歌舞伎芝居取り建て候儀申上候書付

神奈川御開港場所へ、移住相願い候町人どもの内に、歌舞伎芝居取り建ての儀相願い候もの御座候処、右は先般外国人ども神奈川の方へ居留致さずよう

仕向け候為、茶屋、飲食店を始め、遊興見物所迄、戸部村横浜の方へ取り建て候よう仕るべく伺い奉る候処、伺の通り仰せ渡され、此の程は許多の商人ども、追々自普請取り掛り候えども未だ建家も揃いかね候処、此後遊女町等出来候はば、かなり繁華の形勢相成るべく候えども、差向見世物様のもの取り建て候はば人気相集まり申すべ

く存じ居り候、折柄、別紙名前もの歌舞伎定芝居、御開港場所最寄りに於て取り建てたき旨願い出候に付き、とくと取り調べ候処、由緒も慥かなり者の儀に付き、願いの趣聞き届け、芝居取り建てさせ候はば、先は繁華の模様相成り、自然外国人ども神奈川希望の念慮を絶ち、同所へ望を移し候一端にも相成るべく存じ奉り申し候、尤も在方芝居の儀に付いては、かねて仰せ渡せられ候趣もこれ有り、且つ地所の儀、未だ御勘定奉行より引き渡し以前の儀にもこれ有り、ほか遊興見物所とも違い候儀に付き此段伺い奉り候、尤も差向候儀に付き急速御下知御座候様仕りたく、これに依り此段申し上げ候、以上

未四月 大久保加賀守領分
相州足柄下郡 五名

芝窪村
音曲舞太夫
相尾上
大橋四郎治

ここで、芝窪村は荻窪村の、相尾上は桐尾上の誤りであることは明らかである。この文書は、桐尾上と大橋四郎治からの願書を受けた外国奉行が四月二十一日に老中へ上申書を提出した際の写しである。ちなみに、五名とは

当時の外国奉行五名の略で、水野筑後守忠徳、堀織部正利熙、村垣淡路守範正、酒井隠岐守忠行、加藤彦岐守則著を指している。

冒頭に「本上申書が四月十一日ノ呈出ニ係ルコト、村垣淡路守公務日記同日ノ條ニ抛ル」とあり、『村垣淡路守公務日記』の四月十一日の条には、これに対応する次の一文を見出すことができる(19)。

横濱江常芝居願承届候申上進達
大久保加賀守領分
相州足柄下郡 萩窪村
音曲舞太夫 桐尾上
大橋四郎次

(ここ)で、(大橋)四郎治が四郎次となつてゐるが、先の『幸若舞曲集』の中でも両方の呼び方が併存していることから、この違いにはあまり頓着しなかつたものと思われる。

この上申書の中で、「とくと取り調べ候処、由緒も慥かなり者の儀に付き願ひの趣聞き届け」と記されているので、大橋義友の作成した由緒書の効果は十分にあったものと考えられる。また、注目すべき点としては、「此の程は許多の商人ども、追々自普請取り掛り候えども未だ建家も揃

いかね候処、此後遊女町等出来候はば、かなり繁華の形勢相成るべく候えども」という表現から、この四月の時点の横濱は、実際には未だ街の形をなしていなかつたことが分かる。

またこれに続く文から、遊女町と歌舞伎定芝居場建設事業を一对とみなし、外国人を東海道筋の神奈川から離れた横濱に移住させるための切り札として力を入れている。すなわち、劇場建設の願ひ出は外国奉行にとつては歓迎すべきことだったのである。

この文書の中で気になる点としては、「尤も在方芝居の儀に付いては、かねて仰せ渡せられ候趣もこれ有り、且つ地所の儀、未だ御勘定奉行より引き渡し以前の儀にもこれ有り」と書かれていることである。前者は、天保の改革の際の、「江戸・大坂・京都の三都の狂言座以外では一切の芝居興行禁止」以来、なし崩しになつて来ているが、在方の常芝居を公には認めていなかったことを示している。また、後者

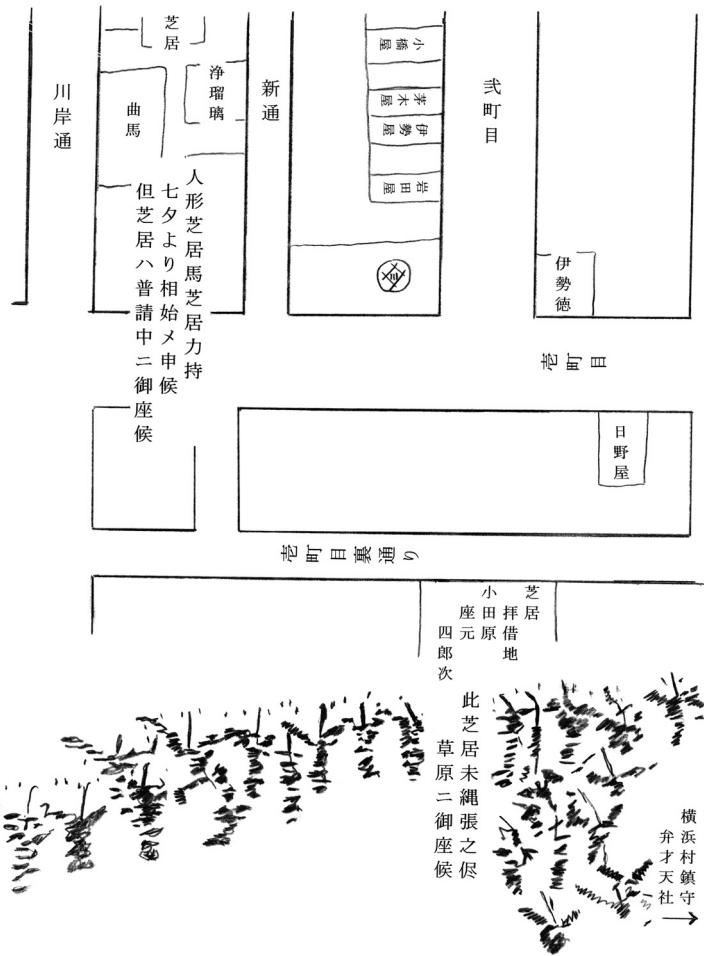


図2 「開港当時横濱之図」(注(14))の抜粋 (模写、文字の翻刻は筆者)

い。そこで次節は、許可を得た場所を地図上で確定することにより、その後の義友と桐尾上の活躍を見ていきたい。

(四) 桐座地所の実在

小田原桐座が横濱で興行を行つてきた可能性を検証するため、この下田座と関連して、先に斉藤によって引用された「開港当時横濱ノ図」を仔細に調べることとした(14)。これを見ると、下田屋文吉が所有していた新通(北仲通)と川岸通(海岸通)

に関しては、横濱の上知をどうするかという基本的な問題がこの時点では未だ結着していなかつたことを意味している(20)。その後、由緒書によれば七月には許可が得られたことになっているが、これを証拠づける幕府側の文書は見つかっていない。ここでは仮に由緒書を信じ、安政六年七月に許可が出たとして、実際に桐座の横濱進出はどの段階まで行つてから頓挫したのか、その間、義友と桐尾上はどういう動きをしたのか明らかになつていな

の間には、芝居座、力持、浄瑠璃、曲馬という囲みの上に、「人形芝居馬芝居力持七夕ヨリ相始メ申候但芝居ハ普請中二御座候」という付箋が貼られていることは先に述べた。ところが、同じこの図の中において、一丁目裏通と弁天社敷地の間の一角に、「芝居拜借地、小田原、座元四郎次」と記入された囲みを見出すことができるのである。さらに、この場所には「此芝居未繩張り之俣草原二御座候」という付箋が貼られている(図2)。

また、先に引用した安政六年七月の『御交易場所附并諸商人軒数明細書』のなかで、間口と商人名が無記載になっている「一丁目うら町・芝居地所」というのも、大橋四郎治義友が拜借したものと推定出来るのである。

これらの事実から、先に引用した安政六年十一月の三井『永書』に記された「当地彦丁目裏通り江先頃より芝居普請出来、先月中頃より相始メ候得共、何れも旅役者計、其上直段割合高直二付、一向不入之趣」というのは、斉藤がいう下田屋のものではなく、小田原四郎次、すなわち大橋義友と桐尾上の芝居小屋のことであったとみて間違いないだろう。

すなわち、安政六年七月頃から海岸通で下田屋が人形芝居、

馬芝居、力持などの興行を始めていたという斉藤説は正しいが、それより数ヶ月遅れの十月には、大橋四郎治義友が一丁目裏通に芝居小屋を建て、そこで本芝居を始めていたものと推定できるのである。したがって、もし下田屋が仮小屋を建てていたとすれば、安政六年十月時点では芝居小屋らしきものは、二箇所あったことになる。

さらに、先の下田屋の項で述べたが、『横浜沿革史』に書かれているように、文久元年(一八六二)九月の時点でも常芝居小屋建設の許可が得られず、やむなく子供手踊に変更してやっと小屋建設の許可を得ていることから考えると、安政六年当時の下田屋文吉に正式な常芝居興行の許可が得られていたとは考えにくい。従って、この当時正式な許可を得て芝居興行していたのは、桐座のみであったと考えられる。(つづく)

注

- (1) 石井富之助「劇場桐座由緒書」『神奈川県史研究』第九号、神奈川県企画調査部県史編集室、一九七〇年
- (2) 『小田原市史』通史編・近世、小田原市、一九九九年
- (3) 『神奈川県史』各論編三、神奈川県、一九七〇年

- (4) 『横浜市史稿』風俗編、横浜市役所、一九三三年
- (5) 斉藤多喜夫「横浜の劇場」『横浜開港資料館紀要』第二〇号、横浜開港資料館、一九九二年
- (6) 「珍事五カ国・横浜はなし」『神奈川県郷土資料集成』第一―三輯、神奈川県図書館協会編、一九五八年
- (7) 「横浜御貿易場大絵図」(安政六年・新栄堂)、『横浜店書類ノ内』、三井文庫所蔵
- (8) 太田久好「横浜沿革誌・全」有隣堂、一九七〇年
- (9) 『永書』安政六年十一月、三井文庫所蔵
- (10) 「安政六年現在横浜町居住商人配置図」『横浜市史稿』風俗編、横浜市役所、一九三三年
- (11) 五雲章貞秀画「横浜本町景港崎街新廓」山口屋藤兵衛板、万延元年閏三月改、横浜開港資料館所蔵
- (12) 「安政六年八月横浜町割図」『神奈川県史』資料編十、神奈川県、一九七八年
- (13) 「(復刻) 横浜歴史年表」白話社、一九七三年
- (14) 「開港当時横浜ノ図」、『横浜当時見世台所土蔵絵図ノ内』三井文庫所蔵
- (15) 「安政六年七月改・御交易場所附并諸商人軒数明細書」横浜開港資料館所蔵
- (16) 『神奈川県史』資料編十、神奈川県

奈川県、一九七八年

(17) 『横浜開港始原』坤二二五号、内閣文庫国立公文書館所蔵

(18) 『大日本古文書・幕末外国関係文書』二三二二六号、東大史料編纂所

(19) 「村垣淡路守公務日記之十五」『大日本古文書・幕末外国関係文書』附録之一一七、

(20) 『大日本古文書・幕末外国関係文書』二三二七八号、九八号、一〇五号、一三二号、一三七号

(付記) 本稿は、『藝能史研究』第二〇七号所収の荒河純著「小田原桐座の開港地横浜進出」に加筆したものである。

新会員紹介

名前(敬称略) 住所
飯田 宗男 小田原市荻窪
山口 正起 小田原市扇町

会員の方へお願い

— 新規会員募集 —
小田原史談会では常時新規会員を募集しております。郷土の歴史に興味をお持ちの方に是非会員になっていただくよう、お誘い下さい。申し込みは史談会役員または左記へ連絡願います。会費は年額三千元です。

小田原市堀之内三二一・一五
電話 〇四六五・三三七・一七八
植田士郎

片岡日記 昭和編(六)

片岡 永左衛門

昭和二年九月

十四日

夜明前より大雨となる。雨中を出勤、十時頃より多少間断あり。午后より晴る。夕刊二因れハ熊本縣ニ暴風雨ノ為大海嘯、横濱ニ旋風有り。各地出水甚しと。

若江先生御出張承諾ニ付打合ニ外郎ニ至るニ不在ニて山田ニ立寄、八時帰宅。

昨日の学校問題ハ町長ノ意志ヲ徴したるも不得要領ニテ各区より実行委員ヲ撰出スルコトトシ町會議員ノ非難も出、次ノ撰挙ニハ政黨ニ関スル者ハ撰出セサルノ申合ヲナシタリト。七時發電車にて上京。午后二時、青山會館ニ蘆花徳富健次郎氏ノ葬儀ニ會葬、夕刻より高木氏往訪。洵席有り十時帰宿。

十五日 晴

外郎ニ立寄出勤。

江戸口見附跡拂下ノ噂あり。町役場よりハ史跡ナルヲ回答セシメ、猶神奈川縣ノ史跡保存協會ニハ昨日拙者より書状出す。

十六日 曇

避暑に來りし孫加奈子の帰るさに余の消閑の料にもと残したる小冊子を開けは身まかりし妹、孫の写真いたり。*此頃や、忘れしをあなうらめしき心地しける、

いつしかと忘れしものを手にとれば
(いままいらに)
こゝろくもれり孫の繪姿

*長男親一の次女幸、四女泰子は関東大震災で死亡。

十七日 曇

十八日 雨

十九日 晴

今井氏より招電ニテ參會。中田、高橋、小嶋、石黒全席。在職中慰勞金受授ノ件ニ付手續キ上ニ不快ヲ感シ可否ノ相談有り。

廿日 午后より雨

松江先生東京より來着ヲホームニ迎ひ、外郎ニ至り。御入門六人洵席を了り三時半散會。帰途尾崎ニ立寄、四時半帰宅。

廿一日 晴

廿二日 雨

廿三日 雨

廿四日 晴

東京發横濱ニ下車。來十月一日車橋(横浜市中区石川町)落成開通ト共ニ電車延長ノ為種々準備ニ混雑の中を通り抜け高田方ニ立寄、一同無事。全家の新築も此程落成し甚旧觀を改む。横濱より乗車し五時帰宅。

廿五日

七時發氣(汽)車にて国府津ニテ下車。小八幡ニ至り一里塚の遺跡を調査し、酒匂上輩寺ニ立寄古碑を研究せしも得る処なし。帰途寺町にて二、三寺立寄しも是又得る処なし。

廿六日 晴

午後六時より国府津小宮氏洵席ニ出席。拾時帰宅。十時半頃早川停車場前ニ出火数戸焼失。

廿七日 雨

帝国大学史料編纂掛相田二郎氏より小田原古文書採訪の書状來る。書中高源寺文書ト有るも同寺の古文書ハ曾て聞不及、為念雨中を谷

津ニ至り高長寺に至り閲覽セシニ、同寺ト長吉寺を合同し高長寺と改稱セシも、其當時より高源寺に古文書ハ勿論寺宝も皆無にて引継も無かりしとて、拙者の記憶の通りなりし。

廿八日 雨

土地賃貸價格調査委員會ニ出席。會長の選舉ヲナシ、來ル十月十三日迄ニ各町村内調査原案調査ノ為メ休會。

廿九日 雨

三十日 雨

十月

一日 晴

午後より洵席。

二日 雨

東京帝国大学史料編纂掛史料編纂官相田二郎、編纂官補橋村博、相州文書採訪ニ出張。兼約にて停車場より全行。蓮上院ニ至り西光院蓮上院文書を披見、北条氏綱自筆の文書等を發見、本誓寺ニ廻り同寺文書を採訪、四時發急行電車にて栢山善榮寺ニ至り後水尾帝宸翰を調査せしニ、今ハ同寺ニ所蔵無し。多分八十余年以前ニ雷火に焼失ノ折ニ焼亡せしならむとの事にて判然せず、今寺より一行と別れ五時帰宅。七時、五十嵐氏ニ御傳へ、十時に了ル。

三日 晴

午後四時、瀬戸秀兄氏來訪、史談ニ時を過す。

七時辭去。氏ハ藩史材料採訪の帰途ナリト。

四日 晴

本誓寺ニ立寄出勤。宮ノ下出張。本日位置移轉ニ付十時發にて出張。四時帰宅。

五日 曇

六日 晴

町役場ニ立寄る。兎角不円満の兆あり。吉田町長より後援云々の懇談有る。

七日 晴

八日 雨

帰途今井氏ニ立寄る。慰労会問題ニ付同人の了解あり。

九日 晴

昨日の雨に引替好晴。早朝古文書の件ニて本誓寺を往訪。

午後當地藩士団体の有信會大會の招待により酒匂海岸の會場に至る。大久保子爵も來場、挨拶あり。四時散會。

小田原町誌編纂には萬事を放棄し材料の採訪には夜起もなし或は寸暇を利用し寒暑いとす深更迄も執筆なせしか、其の容易ならざるにうみはて壹度ハ材料も火中と思ひしも又心を振起し数十年の丹精せし結果、今ハ唯一の史料となり、自然に人にも知られ、藩史編纂の委員を囑託せられ、今日ハ會より招待を受、旧藩主より慰勞の辞など有りしハ昔しハ昔し、今ハ今、時勢の推移とは雖とも余榮と言へし。

たらちねの親の居まさは家つとに

かたらむものを今日の恵みを

帰途車上より酒匂川の秋景に見とれて

酒匂川河原の尾花秋ふけて

夕への月のかけも浮へる
水にた、よふ夕月のかけ

十日

午後より雨

十一日 晴

午後二時発にて横濱より乗替大森にて下車、

徳富氏ニ至る。先生未だ帰邸なく夕食の馳走等婦人より款待を受く。待間に庭を詠て

月はいま松をはなれてかけ清し

庭もせましくなく虫の声々

六時後帰邸す。来る十四日鹿兒嶋より招待にて旅行前の多忙にも不拘、足柄史料の序文を快諾せられ辞して親一方に止宿す。

十二日 晴

午後一時国民新聞社に蘇峰先生を往訪すれハ序文出来披見すれば望外にも拙者の性行経歴も文中に動するのみならず友人として署名ありしハ甚た恐縮す。一時十五分新橋発にて帰宅。

十三日 曇

早朝吉田老母死亡の通知に接し悔(くやみ)に立寄り十時より賃貸価格調査委員會ニ出席。猶自町村内調査の為メ廿日迄休會し、其間委員を派し各郡と比較調査する事とし委員を撰み散會。夜二入り吉田氏ニ至り一時帰宅。

十四日 曇

吉田ニ行く。八時吉田老母會葬の為メ親一夫妻來泊。

十五日 晴

維新史料編纂官大塚武松編纂官補史料採訪ニ來る。片岡文書五冊、明治小田原町誌明治元年より拾年迄式冊を貸与ス。吉田老母葬式ニ至り三時過帰宅。親一夫妻六時発にて帰宅。

十六日

吉田老母忌中拂、午後四時帰宅。ひろ子六時発にて帰宅。

十七日 時々雨

午後久野総世寺に至る。大森氏頼の墓所を見しに、傳記には全寺旧地より移轉の時墓地も共ニ移したりと云も、時代相違に失望す。帰途東泉寺(院)裏に兼て聞及ひたる石器を見しに、一方ハ凡七寸五分、一方ハ八寸五分位の円形にて全長壹尺六寸五分位の石棒なるも、惜しき事ハ二つに折れたるなり。幻庵屋敷を見て五時頃帰宅す。

十八日 晴

*松島事件も箕浦氏ハ無罪ノ判決有りしと。是か一無名の平人なりせは如何ニ判決せしか法律ニテハ無罪なる可きも徳義トしてハ如何。今朝茄子の香の物を見て

箸とりて偲もおかしうとめの

よめにおしみし茄子のあしはひ

*大正十五年におこつた大阪の松島遊郭移転に關する収賄事件。十三日に判決があつた。

十九日 晴

廿日 晴

大橋先生御臨席洵席。

廿一日 晴

委員會ニ出席。調査未了にて猶廿五日迄休會。

廿二日 晴

午後五時発にて上京。親一ハ昇仙橋(峽)ニ同社員と今夜出發前にて都合よし。

廿三日 晴

音羽蓮光寺洵祖彰徳會ニ出席。午前法要、午後より諸先生方の洵話有り。三時半散會。親一方ニ立寄り五時三十分新宿より乗車。帰宅すれハ今朝全行員と箱根に遠足の龍夫帰途に立寄り居る。是ハ午後九時発にて帰京。

廿四日 晴

廿五日 晴

午前委員会へ出席、午后より湯河原へ至る。板碑ハ足柄両郡にハ未発見なるに、沼田頼輔氏ハ湯河原大師の境内にて見たりとの事なれば、郡の西南端に現存するハ他地方より移したるにハ非るかト其真相をと来り見しに、板碑ハ見當らざるも、根府川石の板碑に似たるもの有し、是を見誤りしか。再探を期し保善院、天寿院ニ立寄り古文書の有無を問合せ、六時帰宅。

廿六日 晴

土地賃貸價格調査委員協議會ニ出席。

廿七日 晴

午后稅務署ニ於テ土地賃貸價格調査委員會議開會。原案ヲ修正シ宅地、田畑、山林共總テ原案より二級引下を決議し散會。

廿八日 雨

足柄史料原稿、村松印刷部ニ郵送す。

廿九日 晴

三十日 雨

三十一日 晴

十一月

一日 晴

二日 晴

宮の下出張所に至る。帰途午后より觀楓の好期なれば仙石より湖尻に出、午后六時半帰宅。

風にちる尾花を袖にはらみつ、
下る箱根の海尻のみち

三日 晴

足柄旧道の踏査は先年よりも思立しか、當秋はと先日より此次の日曜を予定しても全行者の差支などにて又延々となりければ弥節と思ひ定めたるに、昨夜食事とき十五才なる下女に戯に弁當持に行か、と云しに門前の小僧習ぬ経をの格なるへし。旅行遠足の談話は常に小耳に挟み居れば、如何に面白きものと思ひてか行度由にて全行と決し十一月三日の祭日に門を出れば、空よく晴れ、渡り鳥の鞠を投しかと、落るかと思は安かり、集るかと思はれは飛散るも面白し。

秋清く晴れたる空を渡り鳥

落ちめぐりては鳴て飛ゆく

八時発の大雄山鉄道に乗れば參詣に乗る人も多し。関本にて下車すれば路は思ひしよりもよく、たりや(ダリア)、菊の咲匂ひ、関本校の運動會に来る男女の生徒又は姉妹と連立、母、祖母などに行逢ひ路行人も淋からず。福泉は不便なれとも住心もよき処なるへし。菟野にて振り返り見れば酒匂の流域より国府津海岸より相海も一目なり。矢倉澤の関所は其儘に末光氏の居宅となりしも規模も小さく箱根の比にあらず。折悪く主人は不在なりしも蜜柑の馳走になり、小休して立出る。此村より先は道路も震災後未だ復旧せず。されとも矢倉嶽の麓にて咲続く野菊、紅葉に心を慰め谷川の流れも清く白く箱根に登るに異ならず。

目に紅葉耳には谷の音すみて

あゆみもあかぬ足柄のみち

矢倉沢より半里、地藏堂は足柄地藏を安置し、三、四十の人家はこゝ、かしこに見る山間の一部落なり。是よりは路も細く登りも多し。漸々登れば左方の足元にて人声聞ゆ。石に登り觀

見れば道路開鑿の測量にて、此山間も近き内には自動車も通行も出来得へし。

空腹を覚へたれば路傍に切置きたる枯木に腰かけ弁當を開き、又登り始むれば下女は余程疲労したる様なれば、慰め〳〵して登る路の右手に神奈川静岡の縣界にて相駿の国境ともなる木標有り。今は焼失したる足柄明神の社址も過れば木陰より芋畑の見ゆれば、下女は峠も(に)来ましたと喜ひしに程なく家の棟も頭れ人声も聞ゆ。爰昔しよりの八郎兵衛峠のひとつ家にて、其當時よりは幾分改築し家屋も小さく今は木挽を業とし傍ら茶店をもなせは立寄、残りの握飯を食し暫く足を休め足柄聖天に參詣す。遠近より參詣の信者多く此日も二、三人を見受たり。小坂を登れば峠にて、竹の下、御殿場、其他の村落の點々する厨野を隔て富士は正面に望、絶勝なるに、相悪(生憎)に雲に姿に見へざるは遺憾の極みなり。

白妙の富士は雲間にあと消へて

尾花にのこる雲の面影

苔むせる石の地藏尊の立せます六地藏は風にゆらく尾花、野菊の咲きつゝ、き公園かとも思わす。芝生にて左方の麓には竹の下の部落より足柄旧道の纒(わづか)に残る松並木に古も偲はる。

昔ししのお松乃並木の色はへて

尾花につゝ、く足柄の路

道を右にとり小山路に入れば一面の茅原の下りとなり、関本より五里を徒歩し停車場に着せしは三時を少し過ぎたり。是より気(汽)車と聞き下女も元氣となり、町をこゝ、かしこに見あるき、四時発に乗り松田にて急行電車に乗替、五時半に帰宅。

小田原史談会セミナー「小田原を掘る」

要旨

第十一回(小田原の歴史を掘る 第三回)

平成二十七年十一月十九日

「古墳時代後期から

奈良・平安時代の小田原」

講師 渡辺 千尋氏

(小田原市文化財課)

古墳時代後期

古墳時代後期は六世紀、七世紀初。酒匂川西岸で古墳が多く造られた。久野諏訪ノ原一号古墳は直径約四〇メートル、周溝の直径が推定約六〇メートルもある大型円墳。久野二号古墳から鉄剣が出土。久野には古墳が多くあり、師長国の豪族の本拠地があったと想定される。天神山一号古墳から鉄剣が出土。終末期に橘地区では丘陵斜面に横穴墓が約一二〇〇基造られた。

奈良・平安時代

千代寺院跡で武蔵国分寺と同範の瓦、畿内製の須恵器、墨書土器、木簡が出土。堀込事業した基礎の建物跡が発掘された。国分寺ではないかと言われたが、他の事例から、千代の廃寺は那家の寺院とされる。北隣の永塚では中央との関係を示す木簡、墨書土器、古代の舗装道路(小田原市郷土文化館に展示)、関東初出土の「美濃」刻印須恵器(岐阜市老洞窯製で年代が特定できる)が出土し、足下那家があったと想定されている。国府津三ツ俣で多数の住居跡が発掘され、那家や千代廃寺を支えた人々が住んでいたと思われる。西岸では小田原駅西口の愛宕山で住居跡が出土した。

第十二回(小田原の歴史を掘る 第四回)

平成二十八年二月二七日

「鎌倉・室町時代の小田原」

講師 吉田 千沙子氏

(小田原市文化財課)

中世前期の発掘例はまだ少ない。

小船森遺跡では、柱穴、井戸を検出、中国製の青磁・白磁などの陶磁器、また、銭繒(さし)・備蓄銭が合計四八三枚出土。遺跡の周辺に中村氏の居館があったことが示唆される。国府津三ツ俣遺跡で、多数の掘立柱建物、中国製陶磁器、古銭が出土し、水路と大規模水田跡を検出。

下堀方形居館遺跡で、内堀と外堀の二重の堀を検出。堀から木製品が多数出土。

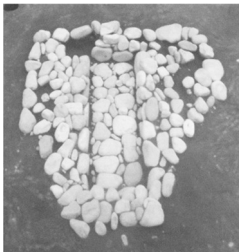
酒匂宿は平安時代末から宿駅として栄えた。酒匂北中宿遺跡で、常滑産甕、中国製の陶磁器が出土。大型の溝を検出。

久野下馬道上遺跡で、多数の玉石を敷き詰めた集石墓一〇基、土坑墓二基を検出。経の文字を玉石に書いた経石、土坑から銅鏡が出土。久野南船原遺跡は、縄文時代の住居跡と考えられていたが、常滑産大甕破片と骨片が出土し、中世の集石墓と判明。久野多古境遺跡で、火葬骨の入った常滑産三筋壺が出土し、被葬者はこの辺を治めていた有力者と考えられる。多古に鎌倉御家人山内須藤氏の一得名があった。

酒匂、国府津は中

世前半に小田原より先に文献に出てくるが、考古学的にもそう言える。

(山口 記)



下馬道上遺跡の集石墓

キャンパスおだわら学習講座《公募型市民企画講座》

歴史講座 『小田原史談会セミナー』 第13回

新シリーズ「小田原の歴史を掘る」開講 好評 第5回!

日時:平成28年5月28日(土) 午前10時~12時

場所:小田原市民会館 5階 第3会議室

講座:『北条時代の小田原城と御米曲輪』

講師:小田原市文化財課 学芸員

申込先:☎ 0465-33-1890 小田原市生涯学習センターけやきの会

定員・費用:50名 500円(資料代込)

平成28年度「小田原史談会」

総会・講演会のお知らせ

下記により「平成28年度小田原史談会総会・講演会」を開催します。会員各位には是非多数ご出席くださるようご案内いたします。なお、総会終了後の「講演会」には会員以外の方もご出席いただけますので、お誘いあわせの上、多数のご参加をお待ちします。

記

日時：平成28年5月7日(土曜日)

- ・ **総会** 午後1時より
 - ・平成27年度事業報告並びに会計報告
 - ・平成28年度事業計画並びに予算計画

- ・ **講演会** 午後2時より

演題 「明石人骨発見者 ^な直良 ^ら信夫を語る」

— 松本清張「石の骨」のモデルとなった研究者—

講師 杉山 博久(幾一)氏 (元小田原市文化財保護委員)

- ・ **場 所：小田原市民会館 5階 第3会議室**

小田原史談会5月の研修会ご案内
**江戸の手本となった小田原早川上水と
 用水が巡る小田原城大外郭西南縁を歩く**

(小田原史談会・ガイド協会会員の山口 隆夫さんが案内します)

日時：平成28年5月21日(土) 小雨決行

集 合：箱根板橋駅 午前8時50分

(12時ごろ古新宿で解散予定)

参加費：900円 (資料代・保険料・お土産込み、
当日、現金で集金します)

コース： 取水口—早川口遺構—小西薬局(上水木樋)
—山上蒲鉾店(工場見学)

定 員：20名

申し込み：平成28年5月1日(日)～10日(火)

電話・Fax 0465-34-8363 平倉まで

(お名前・電話番号をお知らせください。)

不在の場合は留守録となります。

早朝・深夜の電話・Faxは避けていただくようお願い致します。)

小田原・足柄歴史6団体
 合同展示会開催のお知らせ

日時：6月17日(金)

～6月19日(日)

時間：午前10時～午後5時

場所：開成町民センター

(開成町役場隣)

入場料：無料

参加団体：

- ・小田原史談会
- ・足柄史談会
- ・南足柄歴史同好会
- ・足柄の歴史再発見クラブ
- ・山北町地方史研究会
- ・大井町郷土史研究会

小田原史談会は「小田原の映画館と芝居小屋の歴史(仮)」をテーマに展示予定です。

特別賛助会員

紳士服の **アメリカヤ**

手打^{そば}うどん 小田原城趾前 田毎

税理士法人 **報徳会計**

のれんと味 **ざる海**

伊勢治書店

茶半家具株式会社

 **かまぼこ**

ちん里う本店

(株) **オクツ薬局**

割烹料理^{うなぎ} **鳥かつ楼**

 **小田原ガス**

和菓子菜の花

小田原報徳自動車

杉崎茂法律事務所

かまぼこ籠 **清**


平井書店

かみやま小児科クリニック

株式会社 報徳

興電社

建築金物(株)星崎仲吉商店
家庭金物

創業四百年有命
 **料理茶屋 小伊勢屋**

本多時計店

COMTEC コムテック株式会社

学生専科  **マルク**

さがみ信用金庫

曾我の梅干
塩辛・かまぼこ **美の政**

(株) **アルファ**

小田原史談(年四回発行)
創刊昭和三十六年一月
会創立昭和三十年七月

禁無断転載

振替
年会費 普通会員三千円
〇〇二〇二二六四三三六
小田原史談会

小田原史談会ホームページ URL <http://odawara-shidan.hustle.ne.jp/>

小田原史談会

検索

落穂集

「女性は学問不要」という風潮の明治時代、二十九歳で夫に先立たれたにも関わらず「自立し生計を営む女性」の育成を目指して奮闘した新名百刀に宇佐美ミサ子さんが迫ります。旭丘高校の前に建つ新名百刀の像が彼女の生き様を物語っています
▼徳島・山口で幕末まで続いた北條一族を石井啓文さんに教えていただきました。お会いする度、石井さんの歴史への飽くなき探究心に感心させられます▼レトロな建物で知られる済生堂薬局小西本店、内部に居並ぶ薬の入れ箱も魅力的です。御主人の小西正樹さんのお話と田中豊さんの絵を一緒に楽しみください。▼寿昌院の「女の一生」ともいべき「大久保家・・・寿昌院」を書いていただいた野村武男さんの案内で日野市にある忠増の室寿昌院・智光院の墓塔を見てきたのは昨年の十一月末。地元の人しか知らないひっそりとした場所に建てられていました。▼「小田原桐座の横浜進出はなかった」とする通説を荒河純さんは諸資料を丹念に調べ上げ、見事に覆しました。その粘り強さに敬服。大橋家に伝わる由緒書との矛盾について考察する次号が楽しみです▼昭和二年十一月三日、晴れ、六十七歳の片岡永左衛門はお手伝いさんを連れ、手弁当で足柄旧道の踏査に出かけます。美しい自然と老若一人の微笑ましい様子が文章と歌から伝わります。

「小田原史談」原稿募集

論考・紀行・証言等の原稿をお待ちしております。お問い合わせは左記へ。

小田原市南町四一・二四

電話 〇四六五二・三三八六三五

松島俊樹